

諸生党の軌跡を追う

加比 礼三

水戸郷土史家

□ 尊皇敬幕 □

十九世紀後半から今世紀は正に激動の時代であった。この激動の中で、自らの信念一筋に動きながら、うたかたのように消えていった数多くの人達の営みがあった。幕末水戸藩における天狗・諸生の相剋もその一コマであ

る。双方に悲惨な結末をもたらしたが、言わば、何れもが時流の犠牲者であった。その中で、後年、明治新政府によって天狗は顕彰され、諸生は省みられなかった。しかし、このことをもって二者の正邪を判断するわけにはいかない。水戸では今もって天狗・諸生の争いが語り継がれているが、これまた必ずしも

正鵠を射た論がなされているとは言い難い。

頑迷固陋の熟語に括られがちな諸生は、一体何を考え、いかに戦ったか、本号からしばらくの間、幕末水戸藩における諸生党の軌跡を追って見ることにする。

水戸藩は、尊皇攘夷派と尊皇敬幕派に分かれて、幕末の大事な時期に果てしない内訌が繰り返された。前者は天狗党、後者の門閥派が諸生党といわれた。共に尊皇の精神を持したが、諸生は薩長の横暴に敢然と抵抗し、戊辰戦争には奥羽越列藩同盟軍の一翼を担って越後、会津方面に奮戦することになる。

ところで薩長主導による明治維新とは一体何であったのか。これは紛れもなく薩長の下級武士集団と、岩倉具視ら、これまた下級公家の連中が企てたクーデターであった。

まず公武合体体制を崩すことから始まる。岩倉は、さきに皇妹・和宮の降嫁に幕府から

多額の賄賂を取って、これを公家たちにはらまき、取りまとめを行った張本人であるが、政情が変わると一変して倒幕派に与する。

□ 根強い天皇暗殺説 □

一八六六年・慶応二年七月二十日、將軍家茂が大阪城中で死去する。二十一歳の若さであった。死因は脚氣と発表されたが、一説には暗殺とも伝えられる。この年十二月五日、慶喜が將軍職を継ぐが、同月二十五日には孝明天皇が崩御される。これは疱瘡によると発表されるが、暗殺説も根強い。天皇暗殺はどのようにしてなされたか、まで議論されることになった。作家の中村彰彦氏は、著書『極悪人』（ワニマガジン社刊）の「歴史常識のウソ」の項に「孝明天皇砒素で毒殺公武合体吹っ飛ば」という標題で、主治医の日記その他豊富な資料によって毒殺説を詳しく説明し

ている。一方、同書では田村陽太郎氏が刺殺説をほめかしている。田村氏は「天皇と意見を異にした岩倉具視の仕業といわれ、それも彼が短刀で天皇の腹部を刺して殺した」と記している。当時の検死書が残っているわけではないから、真偽は？といわれれば筆者に確答はできないが「毒殺か刺殺か」には新しい証言も現れている。

天皇のご病気が発表されたのは十二月十七日だが、二十五日にはほとんど平常のお元氣を取り戻されたかのようにまで回復された。

そこでご快癒の茶会が設けられることになった。ところが、この茶室には懐に出刃包丁を隠し持った男が潜んでいたのである。

天皇が茶室に入ってからされると、この男は天皇に真正面から襲いかかり、腹部を何カ所も刺して素早く逃亡してしまっただけ。いったい誰がこの男を手引きしたのか。前出の毒殺説

をとる中村氏は、一服盛った犯人について岩倉の実妹堀河紀子勾頭内侍、高野房子典侍、中御門良子の名を挙げてはいるが、堀河紀子だけがこの日のうちに姿をくらまして、その後は全く消息不明で、こうなると誰が命じたかは明白となる。ならば、この悪逆非道の立案者はだれか。大物の公家が絡んでいなければ、岩倉だけで実行はできない。

岩倉は公武合体に反対の大納言中山忠能に持ちかける。新帝になる睦仁親王は、忠能の娘・中山慶子を母とする。外祖父の忠能は、孫が即位できることの喜びに、この計画に同意して実行されたといわれる。孝明天皇の死因については宮内庁の文献にも刺殺と記録されているという。この計画には薩摩が加わっていた可能性は十分ある。更に、この殺し屋を引き入れて出刃で刺し殺す現場を目撃した人物がいた。中山家に奉公をしていた女性某

で、この日の茶会の下準備の手伝いに加わっていて、事の終始を見てしまった。この目撃情報を筆者に寄せてくれたのは、その女性の子孫で、この家に伝わる秘話であるという。

□維新は薩長の天下取り□

徳川慶喜が將軍に就任してわずか五日後の事件であった。慶喜には信任の篤かった天皇が亡くなられては、公武合体の体制は崩れ去ることになる。慶応三年十月十四日、慶喜は大政を奉還する。ここにおいて政治の大権は朝廷側に移った。しかし、政権の委譲は薩長を中心として行われたクーデターによる武家政治の交代ではない。すなわち徳川に変わって政権を奪取した薩長連合の幕府の成立である。「王政復古」「明治維新」、この矛盾する熟語の意味はなんなのか。維新以後の薩長の政治はどうだったのかを改めて洗い出す必要

がありはしないか。平成の今日、官界、金融界、大企業等の不祥事がつづき、あまつさえ東海村に放射能の騒ぎ等、国民は長い間だまされ続けてきたことに気づきはじめた。とはいえ、明治以来百数十年を閲しながら、畢竟は、薩長幕府が確立した政治体制と社会構造の歪みのなかにうごめいているのが、この島の現状のような気がしてならない。

天皇暗殺の首謀者と目される人物の肖像が最近まで日本銀行のお札に載せられるなど、日本とはヘンな国である。

慶応四年（一八六八）の正月は鳥羽伏見の戦いで明ける。この戦いはわずか四日半で決着するが、戦いを引き起こした徳川慶喜は途中で、戦線を離脱して大阪へ逃げ出し、さらに六日には夜陰に紛れて幕府の軍艦・開陽丸で江戸へと逃げ帰ってしまった。

□宙に浮く水戸本圀寺勢□

京都・本圀寺には水戸の藩兵が四百名ほど駐留していたが、これらの兵は、もともと文久二年慶喜が將軍後見職になり、京都に駐在するにあたって、慶喜の警護部隊として水戸藩より送り込まれたものであった。その幹部には開港を説く開明派もいたが、多くは尊皇攘夷を唱えて時代の推移を理解できない頑迷な者たちで、この者たちが隊を掌握していたから、彼らは天狗派とみなされた。

したがって、門閥派が実権を握っている本家の水戸藩のからは駐留の資金は全く送られてこない。さらに前年十月十四日の大政奉還で幕府は崩壊したので、幕府からの援助も途絶えて日々の暮らしにも困窮した。

止むを得ず、水戸の親藩である高松藩の大阪蔵屋敷から一万両を借りて何とか食いつな

いできたのだった。高松藩は十二万石だが、内容は悠に四十万石の収入を得ていた。

高松の九代藩主頼恕は、水戸の斉昭の次いで、高松八代藩主頼儀の養子となったが、藩の財政危機を乗り切るため様々な事業に挑戦する。とくに先代の頼儀が着手した砂糖と塩の生産には周圀の反対を押し切って力を注いだ。讃岐三白といわれるのは、砂糖、塩、うどん粉の三種である。うどんはいまも有名だが、砂糖、塩、二白の増産にも成功し、大阪では高値で取り引きされたから、藩の財政は見事に豊かになった。この豊かな藩から二度にわたり一万両ずつ二万両を借りて過ごしてきた本圀寺勢も、主なきあとの京都にいつでも留まっているわけにはいかず、朝廷に對して帰藩を願ひ出た。

□奇怪な五奸追討勅書□

この集団は幕府にもつかず、朝廷の側にも積極的に加わってはいなかったため、薩長政府もその存在が頭痛のタネの「厄介者」であった。この願ひ出はむしろもっけの幸いとばかり、直ちに受け入れられた。しかし、薩長は、ただ帰したのではなかった。水戸藩の中樞に巣くう門閥派追討の勅書を下したのである。

いわゆる「五奸追討」だが、五奸とは、水戸藩門閥派の鈴木重棟、市川三左衛門、朝比奈弥太郎、佐藤図書、大森弥三左衛門の五名であるが、天皇が一藩の家臣を名指して嚴罰に処するよう指示する勅書など、かつてあった例がない。奇怪なニセ勅書なのは明白であった。後年岩倉は、当時のことを「幼帝であったから、全てはわれわれが決めて執り行った」と告白している。二月十日、本圀寺勢は江戸

に到着して、勅書を藩主慶篤に提出する。門閥派の重臣たちは、彼らが江戸へ入れば、自分たちの身に危険が及ぶであろうことを予測して、その前に江戸を離れて水戸に立ち退いた。そのため、慶篤の周辺は天狗派が牛耳り、江戸の水戸藩邸の政務は彼らの手中に帰したのであった。しかし、水戸へ戻った門閥派は水戸城を占拠していたので、天狗派の尾崎豊後は、武力をもって城を奪取しようと、三月九日の夜、三の丸の松平頼遠の屋敷に集合して協議を重ねる。一方、同時刻頃、門閥派が市内柵町の鈴木岩見守邸に集まって天狗派への対応策を相談していた。

□諸生派の武力蜂起□

十日未明、天狗派の水戸城奪取の計画は実行され、なんなく占拠に成功した。門閥派は戦いを好まず、ひとまず太田の瑞竜山（現常

陸太田市)に拠って動静をうかがうことに決して、同志五百人は夜陰に乗じて密かに太田へと移動した。この三月十日には江戸高輪で勝海舟と西郷隆盛会談が進められていた。

瑞竜山での協議は、薩長の暴挙に徹底抗戦ということに決して会津藩に合流することとし、翌十一日には市川三左衛門を総大将として会津を目指して太田を出発した。

一人、鈴木岩見守だけは一行に加わらず、しばらく瑞竜に潜伏して、後、江戸に上る。翌十二日は天下野(けがの川現水府村)に宿泊、この村の郷士後藤吉兵衛と後藤久米之助の二人が軍に加わり翌十三日には大子へと進む。さきの元治甲子の年、武田耕雲斎の率いる天狗党の西上に際しても、この大子の地を通過しているが、それは、この地域が経済的に裕福で、軍資金の調達に都合がよかつたからである。この市川勢には大子に近い鷲

子(とりのこ)村から薄井友右衛門の一族が参加したが、その上、軍資金として三千両もの大金を献金している。かくしてこの軍に協力する軍勢を募り、資金も蓄えて粛々と兵を進め、三月十九日御代、二十日原に入る。こ

こからは東山温泉郷を抜けて、会津の鶴ヶ城まで、わずかに二里半である。市川は会津藩に使者を送り、城下入りについてお伺いをたてるが、会津城では抗戦か開城か激論の最中で、藩の方針が定まるまで城下に入ることは許されなかった。しかし会津藩の抗戦派は、いざれ戦争になることを予測し、市川勢に千両の金を貸し与え、案内人までつけて、越後へ行くよう勧める。これに従った市川勢は、城下を通らずに三月二十一日、会津坂下(ばんげ)に着いた。これからはゆっぐりと行軍して津川、水原を通過し、新潟に入ったのは四月七日で、部隊はここに七日間滞在する。この

間江戸では東海鎮撫使橋本実梁の率いる部隊が江戸城を無血占領する。これに先立ち、二月十一日から上野寛永寺の大慈院に移って恭順の意を示していた慶篤は、追討軍の江戸入城の前日、すなわち四月十日、江戸を離れて水戸に帰り、藩校弘道館の至尊堂に居を移して謹慎、恭順を続けることになる。

市川勢が越後へ転進している間、江戸の水戸藩邸、さらには水戸城の実権を完全に掌握した天狗派は、藩主慶篤の水戸就藩を願い出た。優柔不断な慶篤もようやく重い腰をあげて三月十七日水戸へ帰る。慶篤を擁した天狗派は、同十九日には諸生党追討を決議し、京から戻った鈴木縫殿は約千人の兵を纏めて東北へと向かった。ところが、就藩して一ヵ月も立たない四月六日、藩主慶篤は水戸城で急死してしまう。その報せを受けた諸生追討軍は止むなく兵を引き揚げ、後に再度追討の軍

をおこすが、市川勢と天狗派の兵が北越の地で遭遇することは遂になかった。

そもそも天狗と諸生が争いを引き起こす原因は、薩長政府による五奸追討など内部攪乱の謀略もあったが、もともとは九代藩主斉昭の人事の誤りに起因する。そして、後を継いだ慶篤のだらしの無さが一層混乱に拍車をかける。慶篤は、先代の斉昭が井伊大老実権下で、不時登城の罪を問われて隠居、謹慎となつた後をうけて藩主になるのだが、親の忠告も聞かず、斉昭亡き後は朝令暮改、ますます混乱を起こし、収拾がつかなくなると酒を呑んでクダをまき、寝てしまうという始末の悪い殿様であった。藩論の統一など全く出来ず、領民や藩士を困らせることになる。

水戸藩内訌の原因はいろいろあるにしても二代にわたる藩主の責任を第一にあげなければなるまい。(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

加比 礼三

水戸郷土史家

◆諸生党新潟に移動

水戸郊外、太田の瑞竜山に籠もって協議を重ねた水戸藩門閥派・諸生党は、薩長の暴挙許すべからずとして、徹底抗戦のため会津との合流を目指し、慶応四年三月十一日、市川三左衛門を総大将に、太田を出発する。同月二十日、会津藩鶴ヶ城に二里半の原に着き、

同城に使者を送って、城下入りの諾否を問うが、会津藩は抗戦か開城か激論の最中で、藩の方針が定まるまで城下に入ることは許されなかった。しかし、会津藩の抗戦派は、いざ戦いになることを予測し、市川勢に千両の金を貸し与えて、案内人までつけて越後に赴くよう勧める。一行は四月七日新潟に着いてここに七日間滞在する。

新潟港は阿賀野川と信濃川の大河が流れ込み、水運に恵まれ物流に優れた良港で、古くから経済的にも戦略的にも重要な拠点となっていた。会津藩は、この新潟港を掌握しようとしていた。市川勢が新潟に到着する前、四月三日には、この新潟で旧幕臣古屋作久左衛門や会津藩士秋月悌次郎、長岡藩家老河井継之助、村松藩士片岡九左衛門が、徳川慶喜の助命と徳川家の存続を新政府に嘆願するため、の会談をしていた。この会談の議長を勤めたのは古屋であったが、彼は上野の彰義隊に加わり敗戦すると、甲斐、信濃を経て越後へ入ってきた。衝鋒隊と呼ばれた一隊で、兵力も市川勢とほぼ同じ六百余であった。

古屋は、幕府の奥医師高松凌雲の実兄で、徳川昭武（水戸十一代藩主）が、兄の將軍慶喜の名代としてパリに赴く時、随行した。弟の凌雲は、昭武とともに大政奉還をフランスで知る。水戸では藩主慶篤が急死し、昭

武の十一代藩主が決まっているので、急遽帰国を連絡するが、フランス政府は出国の許可を出さないうえ、幕府が崩壊して送金も途絶え、帰る旅費さえない。出品していた物産をたたき売って費用を作り、ようやく帰国してくれば、世情混乱の日本であった。凌雲は、帰国後ただちに榎本武揚とともに五稜郭に拠り、函館に病院を建てて傷病兵の治療にあたる。兄の作久左衛門は、初め医者を目指して蘭学を学ぶが、医者を諦めて幕臣古屋家の養子となって幕府に仕える。和蘭語ばかりかフランス語、ロシア語、英語に通じ、特に英語を最も得意とした。この二人の兄弟は衷心からの敬幕主義者であった。

市川勢は、会津藩の作戦に従い、寺泊、出雲崎の港をも制圧する使命を帯びて寺泊へと移動を開始する。市川勢が弥彦を経て寺泊に入るのは四月十七日であったが、これに先立って四月十日には古屋作久左衛門の衝鋒隊三百

人が到着していた。この衝鋒隊は、十二日与板城を取り囲み、古屋は馬に跨がって大広間に入り、軍用金一万両を出すか、または城を隊の宿舎に提供するかと強要した。

与板藩は二万石の小藩ではあるが、彦根井伊家の支藩で、当時の藩主は彦根井伊家から来て与板藩を継いだ井伊直安であったが、年齢わずか十九歳の若い殿様で、この時は新政府の要請により、京都に上がっていて留守であった。京と江戸屋敷に藩士が分散していて戦鬪力を殺がれている与板藩としては、やむを得ず七千両を古屋に渡して解決を図った。

しかし、隊士のなかには城下の民家を襲い、金品を強奪したり婦女子を犯したりする者がいて、長岡藩の河井継之助から抗議があり、物品は返納し、乱暴した隊士五人を打ち首にして地藏堂(現・分水町)へと退いた。

この衝鋒隊は、古屋の英国式訓練によって行軍の際は太鼓とラッパで威風堂々と隊列を

整えて進んだ。

◆出雲崎陣屋に入る

衝鋒隊が去った寺泊へ、市川勢の先発隊三百八十名が到着する。これより更に兵を分けて出雲崎に進出し、代官所を接收して本宮とすべく計画していた。これらの作戦はすべて会津藩と連携して進められたと考えられる。会津藩もかねがね代官所を明け渡すよう交渉していたが、代官はこれに応じなかった。市川勢は武力を行使しても接收することを通告し、漸く出雲崎陣屋に入れたのは閏四月の七日であった。この陣屋の明け渡しを強硬にすすめたのは水戸勢のなかでも最も屈強な隊長伊藤辰之助忠維であった。

辰之助の祖・伊東忠一は小野派一刀流小野次郎衛門忠明の姉を妻としており、代々剣の道に励んだ家柄で、特に辰之助は剣をとって

は諸生党随一の使い手であった。身の丈はあまりないが、筋骨隆々、五人力といわれ、頭には鬘をのせず、坊主頭の異様な風体のヘンな水戸藩士であった。四月一日、この伊藤隊の手に薩摩藩士富山弥兵衛が捕らえられる。

富山はもと新撰組に参加していた。伊東甲子太郎(常陸志筑、現・千代田町の人)等と新撰組を出て孝明天皇御陵の衛士となるが、衛士頭取の伊東が新撰組に斬られ、死体は七条油小路に捨てられる。その折、仲間七人と死体を収容に行き、隠れていた新撰組に襲われて三名が討死、残る富山ら四名は今出川薩摩藩邸に逃げ込んで匿われてた。鳥羽伏見の戦いには参戦せず薩摩藩の厚遇を受けていたが、戊辰戦争が始まると、黒田了介(清隆)の命令により、博徒に身をやつして越後方面の状況を偵察に潜入してきた。ある茶屋に休み、馬に乗り出かけようとしたが、馬の御し方、目配りが尋常でないのを水戸勢の伊藤隊

の隊員にとがめられ、捕らえられて調べを受けるが、言葉に薩摩訛りがあるので疑いは更に深まり、伊藤隊の宿舎二階の柱に縛りつけられていた。だが、富山は二人の見張りの隙をみて縛を解き、窓から脱出して屋根から逃亡する。気づいた水戸兵がこれを追うが、富山は稀に見る健脚で、水戸の追手をまいて雑木林に逃げ込み潜伏していた。暫くして、もう安全だろうと街道方面に出ようとすると、再度水戸勢に見つかり、田圃の畦を走って逃げたが、泥濘に足をとられて転んでしまう。

この辺りは、吉水村草生津というところで草生津は「くそうづ」と読み、臭い水の沸く所ということであるから油田である。富山は運悪く油田に嵌まったからたまらない。

忽ち取り囲んだ水戸勢に首をはねられてしまった。富山の首は町はずれの獄門前に三日間晒された。新撰組、高台寺党、そして西軍の密偵として活躍した薩摩藩士・富山弥兵衛

源豊國三十七歳の最後であった。

出雲崎に入った水戸勢は五月の十四日まで出雲崎陣屋を本営として此処に滞在することになる。この頃から市川三左衛門は久賀三郎衛門、大森弥三左衛門は菊地新蔵と名をかえるが、すべて会津藩との作戦上の打ち合わせの結果であった。

◆佐渡には金塊ゼロ

これより前、四月二十五日には寛助太夫の指揮の下に佐渡の小木港に八十三名、赤泊港へ六十七名が渡っていった。

これは水戸勢についてきた会津藩士鈴木丹下の要請に応じたものであり、渡航の目的は佐渡の金塊を奪うことであった。佐渡じゅうの蔵という蔵を開けさせて調べるが、金は一かけらも見つけることが出来ず、数えきれぬほどの天保銭を集めて帰ることになる。

陸鎮撫使高倉永祐（参謀小林兼吉、津田山三郎）軍が、進駐してきていた。与板藩はこちらにも使者を送り、古屋の強奪を理由に援軍を向けてくれるよう頼むが、先に高倉は勅使と称して奥羽各藩に、新政府に加担する証として兵員と石高に応じた軍用金を拠出するよう通達を出していたが、いずれにも未だ応じていない与板藩の真意を疑って、この願いを聞き入れなかった。与板藩は自衛のため武器の充実を計らねばならなくなった。与板藩江戸屋敷では資金を工面して、アメリカ人より元込めの新式銃を百丁購入して、四月十三日船便で新潟へ送った。江戸を発った船が新潟に入港するのは五月三日であった。会津藩はこの情報を偵知していた。船が岸壁に着くと会津兵が乗り込み、荷揚げを手伝うといって武器弾薬を持ち去ってしまった。この事件と古屋の強奪が、京都に滞在していた藩主に報告されると、若い藩主井伊直安は激怒し、西

市川勢は率いる全員を佐渡へ移す計画であった。その夕刻、佐渡奉行鈴木兵庫頭が出雲崎へ引き揚げてきた。鈴木から佐渡の状況について詳しく話を聞いた結果、佐渡は市川らが立てこもるには不適當と判断したのか、佐渡への渡航は諦めて出雲崎にとどまることになった。先に、四月中旬、会津藩は水原に北越諸藩の代表を招致して会談を行った。

この会談は、征討軍にいかに対処するかを論ずるものであったが、一座に揃って会議を持ったのではなく、各藩それぞれ密議をこらしたものであった。会津藩は征討軍に対しては徹底抗戦を決めていたから、各藩に協力を要請したものであった。与板藩は、藩の存亡に関する重大な問題であるから、新政府の命にも背かず、恩顧を被った徳川家のためにも尽力する旨を説明し、与板藩領と領民の保護を訴えた。会津が、こんな都合のいい話を諒とするはずはない。一方、高田にはすでに北

軍に組するに意を決する。高田に結集した西軍は四月二十二日、山県狂介（有朋）、更に同二十七日には黒田了介を北陸道鎮撫総督府の参謀として送り込み、北陸・奥羽の平定を策していた。

◆水戸勢が先制攻撃

北陸道での戦闘開始は四月二十七日であった。薩長軍勢のほか富山、加賀、尾張等の兵が続々と富山に集結し、一気に街道筋を制圧しようとする作戦を開始し、海岸沿いの道を進み出した。この動きを知った出雲崎の水戸勢からは伊藤辰之助の隊が出動する。両軍が遭遇するのは鯨波であった。

ここでの戦闘は、行軍してくる西軍を水戸勢が待ち伏せして先制砲撃を浴びせた結果、西軍は脆くも敗走してしまふ。緒戦の西軍敗退は山県の作戦ミスであった。富山や高田の

藩兵は戦いに慣れていないのも原因ではあったろうが、山県は、新しく西軍に加わった藩兵が寝返るのを恐れて、各藩の兵を小隊に分けて混成部隊を編成していた。これらの部隊を薩長の連中は督戦隊として後方で指揮しているが、特に薩摩の言葉は何を言っているのか分からない。命令が徹底しなかったのも敗因であった。この敗戦で山県が考えた次の作戦は、常に敵の三倍の兵力と大量の武器弾薬を投入することであった。この方針は以後この戦闘でも実践された。翌二十八日、西軍は鯨波を突破すべく、再度兵を繰り出して水戸勢に襲いかかってきた。生憎、午後からは雨が降りだした。雨は水戸勢にとって最大の敵である。水戸藩の鉄砲は、九代斉昭が水戸城下細谷村で改良して製造した比較的性能のよいものではあったが、所詮は火縄銃で、雨の中では威力を発揮することが出来ない。火器の優劣は、紛れもなく勝敗を決定づけ

る。敵は多勢、止むなく撤退を決め、次の邀撃地点を宮川と定める。大森弥三左衛門も配下の兵六十人を率いて出雲崎を発するが、途中から引き返す。鯨波の戦いで水戸勢に戦死者は出なかったが、鯨波の町の半分は戦火で焼失した。東軍の敗戦に柏崎付近の住民は不安を感じ、家財道具を運び出して避難する騒ぎで、町中は混乱を極めた。

柏崎、寺泊は桑名藩の飛び領地だったので桑名藩兵の一部も参戦したようではあるが、主として奮戦したのは水戸の勇士であった。

◆越後では評価低い市川勢

このころ、東山道を進んだ西軍は、三國峠を越えて小千谷に迫っていた。閏四月二十六日、雪峠（小千谷の南）で東西両軍が遭遇して戦闘が始まる。海道筋の戦いと機を同じくして奥州・北越の本格的な大攻防戦の火蓋が切

られた。これより半年の間、水戸勢は各地に転戦して勇敢な戦いを続けるのだが、当時の越後の記録は水戸の市川勢をさまざま呼び名で記している。水戸の脱走兵・柳組、さらには天狗党と書いているものもある。

水戸藩の内訌では天狗派・諸生派・鎮派・柳派など、幾つもの派閥に別れていたが、水戸での柳派は、天狗・諸生の両派に要領よく

対応していた日和見集団を指すのだが、越後では諸生党の総帥市川の率いる軍団を柳組と書いているのは、どうしたものなのか分からない。天狗と書いているのは越後以外でも見かけるが、天狗党は強奪・火付け等悪行を重ねたから、その名は各地に知れ渡り、水戸藩兵といえば強くて悪い、怖い存在と思われていたであろう。市川勢も越後での史家の評価は、極めてよくない。水戸を追われて落ち着く先もなく、野良犬のように彷徨していた厄介者と思われている。だが、市川らの水戸

勢は、四月二十三日、奥州白石での奥羽越列藩同盟が締結されて以後、会津藩の計らいで同盟軍の第三軍に配属される。そして、海道筋の防衛を委され、出雲崎に滞陣した。越後を戦場にし、庶民に苦難を強いた厄介者は西軍も同じである。古屋の率いる幕臣集団・衝鋒隊も同盟軍に組み入れられて奮戦するが、彼らにはあまり悪評はない。

市川勢を未だに同盟軍と認めていない処に問題はあつた。市川勢は、壮大な夢と目的を持ってはるばる越後の地までやってきたのであつて、今後の戦闘の連続でその意図が見えてくることになる。(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

―歴史の外におかれた侍たち―

加比 礼三

水戸郷土史家

◆勇戦するも衆寡敵せず

慶応四年の閏四月、北越は例年になく雨が多かつた。晴れた日はほとんどなく、梅雨冷えか、この雨と冷気には東西両軍ともに難渋した。東側・奥羽越列藩同盟軍を攻める西側の征討軍総督府参謀西郷隆盛は「河北一円の平定は一瞬のうち」と豪語したが、戦況は西

郷が思うほど簡単ではなかつた。余談だが、諸生党で水戸を追われ、仙台に逃れた友部鉄軒は、のち新聞発刊に参画した際、前記西郷の言葉に抗して東北人の魂を示す気概を顕したが、この新聞が明治三十年に創立した現在の河北新報の濫觴をなしたとも伝えられる。

海道筋の鯨波で戦闘が始まったのは、閏四

月の二十七日であつたが、一方、三國峠を越えて会津攻略を目指す、山道軍と呼ばれた長州、薩摩、尾張、大垣など十二藩の大部隊と戦端を開いたのは、その前日の二十六日（新暦六月十五日）であつた。この大軍を「雪峠」で迎え撃つたのは、幕府の残兵―古屋佐久左衛門の率いる衝鋒隊であつた。この集団は元々幕府の歩兵隊で、フランス式の訓練を受けたうえ、赤い洋式の軍服を着し、フランス製の小銃で武装、さらに戦闘中はラッパで命令を伝達するという近代化された最強の兵達で、わずか百人足らずだったが、数千の西軍を相手に五分の戦いを展開した。

この雪峠の戦いは朝の八時から午後の五時ごろまで続くが、いくら近代化しているといつても所詮は多勢に無勢、衝鋒隊は後退を余儀なくされ、小千谷を経て長岡へと移つていった。この二十六、二十七日の両軍の衝突が本格的戦争の始まりとなる。

海道方面を準備する水戸勢は、二十七日の緒戦で勝利を得たものの、二十八日にはこれ

も衆寡敵せず宮川まで退き、西軍は柏崎まで進入した。二十九日は大雨に見舞われ、道路も寸断されて自然休戦状態となつた。月が変わつて五月朔、山道を進む西軍は小千谷に進駐する。これ知つた長岡藩の河井継之助は小千谷に赴き、慈眼寺での会談となるが、これが維新史に有名な小千谷談判である。

この談判の様子は、多くの史家や作家によつて書かれているが、結果は、西軍の軍監・土佐藩の岩村精一郎を怒らせるために出向いたようなものであつた。両者の激論は、二十四歳の若い軍監が怒るのも当然と思われる河井の大胆且つ不遜な内容であつた。岩村は怒つて立ち上がる。河井は引き止めにかかるが岩村はそのまま退室してしまい、列席の西軍諸士も刀を取つて立ち上がり、険悪な状態のまま物別れに終わった。河井は、長岡藩の嘆願書を持参していたが、これが西軍に手交されるには至らなかつた。「河井継之助伝」にその全文が掲載されているが、読みようによつては挑戦状とも受け取れる。中立を主唱して

いた河井だが、心中すでに西軍との決戦を決意していたのではなからうか。何故なら、岩村との会談の中でも「あなた達は本場の官軍ではないから奥羽越の同盟諸藩とともに討とうと思っている」と言っている。小千谷会談が決裂し、長岡藩が西軍に対して宣戦布告したことによって海道筋で戦闘中の東西両軍に戦路上の変化が求められることになる。

◆家老佐藤図書の首

五月四日、水戸勢にあった家老の佐藤図書信近が、病気のため戦線を離脱し、寺泊まで後退してきた。相当の重病で、菅沼平助という人の家の軒下に倒れ込んだ。同家に収容されて手厚い看護を受けたが、それも空しく、

ここで息を引きとった。菅沼家では菩提所法福寺の同家の墓域に遺体を埋葬した。

この寺は、むかし日蓮が佐渡に流される折に宿泊したことで知られる名刹である。この年・慶応四年は八月で明治となるが、元年十月二十五日、すでに会津藩は開城し、奥羽もほぼ鎮静した後、水戸藩の役人梶又左衛門の代人榊原彦之進という侍ほかが寺泊に現れた。朝敵である罪人の死骸を許可なく埋葬したことは不埒であるとして、住職や町役人の首を刎ねると詰め寄った。びっくりした檀信徒をはじめ、町年寄らの嘆願によって住職の打ち首は免れたが、翌二十六日の夜、榊原らは密かに図書の遺体を掘り返し、首を刎ねて持ち去った。胴の方は元通りに埋め戻されていたので、寺ではこのことに全く気付かず、永い間知られなかったが、後年、寺泊町の町史編纂に際してこの資料が発見され、地元の新聞が報じて明らかになった。結局、水戸からの侍たちが住職らの首を刎ねると言い出したのは、密かに首を持ち去るための威嚇

であったのかも知れない。榊原らによって水戸に持ち去られた首は、市内柵町の高札場に三日間晒された。

法福寺の過去帳には「大乘院実相日信居士信夫善治」の戒名と「水戸藩家老職 佐藤頭正(ママ) 四十四歳病死」と記載されている。信夫善治は、佐藤図書が使用した偽名である。法福寺には、佐藤の遺品として、太刀一振、熊皮、駕籠、金子十兩一分と錢八百文が納められたが、現在残っている遺品は、菅沼家にお礼として贈られた小太刀と、法福寺には太刀が今も大切に保存されている。

稀には、水戸からこの墓を参拝に訪れる人もあるようだが、地元では今も有志はじめ菅沼家、法福寺の住職夫妻の好意で「家老様」と呼ばれて、手厚い供養が行われている。佐藤は、水戸で二千石の禄を食んだ大身であったから教養もあり、尊敬されて親しまれた立派な武士だったのであろう。

佐藤家は父図書と長男、次男、四男の四人が一家を挙げて参戦し、これらの子達もその

後の戦いで命を落とすことになる。

◆庄屋の裏切り

五月六日夜から降りだした雨は、雷鳴とともに七日、八日は大雨となり、晴天がもどるのは十日からであったが、晴れは三日ともたず、十二日は大雨、農家は田植え時にもかかわらず、いつ戦場になるか不安のまま荷物をまとめて疎開する騒ぎで、街道は渋滞し、農民には最悪の年となった。

海道筋の西軍は新潟目指して侵攻してはきたが、出雲崎にも入れぬ始末で、山道軍も朝日峠の戦闘がはじまり、こちらも西軍は大敗し、参謀山県狂介(有朋)は戦況視察に急行するが、この戦いで松下村塾以来の親友時山直八の戦死を知る。この時ばかりは後の元帥も顔色寒く「あだまもる とりでのかがり影ふけて なつも身にしむ 越のやま風」と、心境を詠み残している。

西軍も所詮は寄せ集めの烏合の衆で、長州

と薩摩の間では主導権争いの内部抗争が激しく、統一した戦はできず、兵の戦意喪失を招くことになる。事態は、会津を攻める前に長岡城を攻め落とさねばならないことになったのだが、山県は、榎峠の敗戦に懲りて白兵戦は行わず、専ら砲戦に切り替え、遠くから砲弾を打ち込む戦法に変えた。

一方、海道を進む兵を分けて長岡方面に転進させ、二千五百の軍が五月十日宮本に到着するが、連日の大雨で信濃川が氾濫して対岸に渡れず宮本に滞陣を余儀なくされる。

この転進を知った会津藩士井上哲作を隊長とする二十人と水戸勢の四十五人が薬師峠に布陣した。薬師峠は、出雲崎と与板、長岡へ通じる交通の要衝で、宮本に在る西軍を側面から攻撃できる位置を占めていた。この東軍の陣屋に別山村の庄屋で高橋甚次郎なる男が訪ねてくる。庄屋は「西軍が宮本まで来ているので何とかしてくれないか」と伝えた。

会津側は、大砲や兵力の配備状況を説明して、西軍の攻撃から村を守るので安心するよう

言い含めて帰すが、なんとこの庄屋は、そのまま西軍の陣に走り、つぶさに東軍の状況をご注進に及んだ。長岡城を攻める西軍にとっては、この東軍を捨てておいては背腹に敵を擁することになるので、ただちに薬師峠の東軍を攻撃することに決する。夜陰に乗じて兵を進め、夜明けとともに三方から峠の頂上目指して攻め上った。この時、峠には井上哲作外八名の会津藩士がいただけで、残りの兵は雨と寒さを避けて麓で休息していた。不意を衝かれた会津と水戸勢は戦える状態ではなく取り敢えず後退する。

◆反転攻勢も空しく

水戸の諸生党のうち、朝比奈弥太郎隊は灰爪に、佐渡から引き揚げてきた寛助太夫の隊は市野坪に布陣していたが、薬師峠から後退してきた兵らを合わせて市野坪に集め、西軍に反撃を加えることになる。別山、石地と突進し、朝比奈隊が引き払った灰爪の丘を占拠

していた西軍に戦いを挑んだ。これは水戸の兵だけで、会津は加わらなかった。

勇敢な水戸の兵たちは肉弾戦を展開し、丘の上から撃ち下ろす銃弾ものは、倒されても倒されても、屍を越えて駆け上がり、ついに西軍を追い払った。しかし、それも束の間、西軍は増援隊を次々に送り込み砲撃を開始すると狭い丘の上では支えきれず、出雲崎方面に後退せざるを得なくなった。この戦いで水戸勢は五十四名に及ぶ戦死者を出し、北越における最も過酷な戦闘となった。



昭和四十六年頃、この丘で五体の白骨が掘り出された。新潟大学の鑑定により、これらの遺骨は戊辰戦争時のものであることが判ったが、そのうち二名は女性という鑑定であった。元治甲子の年、天狗党が那珂湊を發つて西上する際、五十六名の女性が同行したという記録はあるが、慶応四年三月十日、諸生党

が常陸太田を出発する時、女性がついて行ったかどうかを知る術は全くない。地元新潟では水戸勢の婦人であろうと書いている向きもあるが、戦闘の状況と手厚く埋葬されていることから推測するに、西軍に炊事の手伝いに徴用された地元の女性ではなからうかと考えられる。この丘の片隅に一つの塚があり、ここには水戸の戦死者の遺体が合わせて埋葬されている。先年、この丘の所有者の荒木さんと水戸在住の有志三人が、それぞれに私財を投じて供養碑を建立した。大きな立派な碑で、普段は人の訪れることもない台地に、薬師峠を睥むかのように建てられている。



灰爪での敗戦の日、出雲崎を本宮としていた市川隊は撤退を決意し、日暮れて後、寺泊へと移動を始める。西軍は一気に海道筋を制圧し、同時に長岡を攻略しなければならぬため二万余の大軍を増強して攻めたてる。

この場は逃げるが勝とばかり市川勢は退くが、逃げる際には町に火を付けて焼き払い、混乱に乗じて逃げるのが常道なのだが、市川は、世話になった出雲崎の町民に迷惑がかからぬようにと陣屋前の広場に薪を積んで燃やし、火の手があがったように見せかけて二ヵ月間滞在したこの町を離れた。この行為は地元の人達に感謝され、さすが礼に篤い水戸・門閥派の侍たちよと称賛されている。

長岡城を目指す海道筋からの西軍は、連日の大雨で増水した信濃川を命がけで渡河し、山道筋を進んできた軍と呼応して長岡城へ襲いかかった。当時の城は、現在のJR長岡駅のところにあつて、駅前には「長城跡」と刻んだ貧弱な石が立っているだけで、往時を偲ぶことはできない。平城であつたから防御には不適であつたのか、自ら新兵器のガトリング砲を操作して防戦するさしもの河井継之助も肩を敵弾に撃たれて負傷し、藩主牧野忠訓も城を出たので籠城を諦め、城に火を放つて撤退した。長岡城の落城は五月の十九日であつ

た。二十二日なると奥羽越同盟軍が加茂に集結して巻き返しを協議する。二十四日までこの軍議は続き、各藩の配置が決まり、寺泊の水戸勢は再び海道を守備し、出雲崎を奪還するよう伝達される。ところが、薩摩の軍艦乾行丸と長州の丁卯丸が来襲して、寺泊に停泊していた幕府の軍艦順動丸と砲戦になり、順動丸は大破撃沈されてしまう。続いて二艦は陸に對して猛烈な艦砲射撃を浴びせたので町は破壊し尽くされてしまった。

◆曇りなき尊皇の大義

海に浮かぶ軍艦では、果敢な水戸勢でも始末が悪い。やむなく弥彦へ撤退するが、東軍は大反撃に転じ、中越の蒲原平野で一大決戦の開始となる。長岡藩兵は長岡城奪還を目指して軍を進め、会津、桑名、水戸の兵は与板城を攻略するため、信濃川を上流に向かう。先陣をきつて与板藩兵と遭遇して戦闘が始まったのは金ヶ崎で、五月の二十八日であつ

た。緒戦で与板藩兵を破り、勢いに乗る水戸勢は与板城を見下ろす陣ヶ峰に攻め入つた。

与板側は落城を覚悟し、城にも町にも自ら火を放つて混乱を起こして必死の防戦に努めた。二十九日ようやく西軍諸藩の応援が到着し、城の周辺五里にわたり防衛線を構築して守備を固めたので、与板は危機を脱したが、これより与板の攻防は一進一退のまま六十日も続くことになる。

六月に入ると、降り続く大雨で信濃川は遂に氾濫し、与板の町は舟で二階から出入りする有様となり、川沿いを進んでいた水戸の寛助太夫隊は、大水には勝てず山上へ陣換えをする。なにしろ信濃川は二百八十年の間に二百八十回の大洪水を起こした暴れ川で、流域住民の苦難はひと通りではなかつたが、この時ばかりはむしろ休戦を天佑神助と喜んだ。平地は洪水で休戦状態となつたが、高所では陣ヶ峰の要衝の争奪が続いた。

六月六日の戦闘で、水戸勢の一人の藩士が深手を負つて後退した。この侍は、名を戸崎

留五郎といい、桜田門外で井伊大老を誅した十七士の一人佐野竹之介の兄弟であるが、諸生党に加わり、その子徳之介と親子そろってやってくる。子は負傷した親を肩に支えて、弥彦の旅館「のとや」までたどり着いたが、八日にはこの旅館で落命する。

遺体は「のとや」の主人の計らいで、弥彦神社の裏手にある宝光院の墓地に埋葬され、「戸崎留五郎之墓 水藩」と刻まれた石碑が今も残っている。越後に戦つて散つた水戸の勇士は約百五十人に達するが、墓が確認されているのは佐藤図書と留五郎の二人だけで、灰爪以外の戦死者の大半は墓もなく、名も判らず、消息は全く不明である。

多くの犠牲者をだしても結末は崩れず、その後もお戦い続ける諸生党の勇士たちは何を目的に突き進んだのか。諸生といわれた人士の言動を仔細に追ってみれば、勤皇の大義に生きようとすする心に曇りはなく、むしろ尊皇の旗幟に隠れて専横を極める薩長への憤りであつたのかも知れない。(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

加比 礼三

水戸郷土史家

◆会津に諸生党鎮魂碑

洋の東西、時代の如何を問わず、歴史の歯車は時の権力者の正義を軸にして動く。勝てば官軍——である。明治維新が、三百年に及ぶ徳川幕藩体制の殻を破って、世界に門戸を開放し、日本の近代化の夜明けとなったことに異論をさし挟む余地はないとしても、その時代に息づいていた人々にとって、それだけの立場でひたすら思い募らせていた信念もあれば、正義もあったのである。ただ、それが一時でも時流に乗っていただけかどうかで、歴

史的には光と影を作ることになる。

諸生党の歴史は、いまだにその大半が埋もれたままになっている。否、その時代からすでに百数十年を経て、いまや抹消されてしまったといっても過言ではない。筆者が、水戸に残された伝承をたよりに新潟、会津地方に散在する諸生党ゆかりの地を渉猟して求め得た資料も僅かに過ぎない。しかし、諸生党の様々な言動から考えると、彼らが王城守護の任にあたった会津藩と共に粘り強く勇敢に戦った戦意の根源は、勤皇の大義は我にありとして、薩長こそがむしろ錦旗を笠に着て策謀を逞し

くする私欲の輩と見なしていたからと判断せざるを得ない。筆者は、政談春秋の誌面をかきりて、既に三回にわたり、その軌跡を追ってきたが、その間、奇しくも本年五月二十五日、会津若松市の財団法人白虎隊記念館敷地の一隅に『諸生党鎮魂碑』建立の除幕式が行われた。

式典には地元の建立者代表栗栖平造氏をはじめ、三橋正雄会津史談会会長、同畑敬之介元会長、白虎隊記念館の早川廣中館長（元会津市長）ほか関係者、水戸からは諸生党の後裔が組織する仰天会の大森信英代表らが参加し、筆者も末席を汚したが、詩吟の献上などもあって賑かなうちにも和氣藹々の式典となった。会津鶴ヶ城の防禦戦は、水戸諸生党の力戦に負うところが大きかったのだが、前号に引き続き諸生党の越後の歴戦と会津落城に至る戦いの経過は次号に譲ることにして、本号では筆者が与板町（新潟県三島郡）で見つけた史料により、越後の地で数奇な運命のまにまに生きた諸生党戦争未亡人の話を紹介す

る。水戸にこの話は全く伝わっていない。

◆「水戸の後家」を名乗る

慶応四年の秋ごろというから、既に明治と改元（慶応四、九月）されていたかも知れないし、ちょうど会津落城の時期にあたる。

出雲崎から薬師峠を挟んで長岡に通じる五里ほどの街道筋にあった別山という村に、歳は四十がらみ、寝れ果てた旅の女性がやってきた。この辺りは、つい数ヵ月前まで西からの征討軍と東の奥羽越連合軍が激突を繰り返した戦火の跡も生々しい地域だが、この別山村に寺沢新六という人が経営する旅人宿があった。菅笠、脚絆、草鞋姿に杖を手にしたその女性は、旅の疲れからかよろけるようにしてこの寺沢屋旅館の門戸を叩いた。

遠方からの旅人であることに違いないこの女性を、日当たりの良い部屋に案内した宿の主人は、宿帳を出して「どちらからお出でですか」と聞いた。「私は名乗れるような身分

ではありません。常陸の国は水戸の在から出てきた者ですから「水戸の後家」とでも呼んで下さい。別山という土地に参りたいと思ひます」と答えた。新六は、ここが別山であると説明すると「暫くご厄介になりたいと思ひます。不束者ですが、何とぞ宜しくお願ひ申し上げます」と、畳に三つ指をつき、礼儀正しく頭を下げた。作法になつたその仕草、身振りからして武家の出と察した新六は「失礼なことと思いますが、この別山になんのご用事がありなさるか。お役にたつことでもありませんら言つて下さい」と尋ねた。

水戸の後家の話によると、戌辰の役で良人が別山で戦死したので、その場所を捜し出して墓をたて、供養することが目的である。良人の下僕が命からがら水戸へ逃げ帰り、良人は会津に向かつて敗走の途中、別山というところの杉林のなかで官軍の手にかかり落命したという報告をうけ、旧盆を済ませ、水戸を出発したが、病弱ゆえに此処に辿り着くまで一ヵ月かかった、という。新六は「その水戸

の武士は大男で剣の使い手であつたらう」と聞いたのち、戦死した場所はこの裏山で、いくらも離れていない事、またその武士の戦いぶりが天晴れであつた、と話して聞かせた。

水戸の後家は、とめどなく流れ落ちる涙を手巾で拭いながら「ここが主人の最後の地であつたとは仏のご加護です。主人の最後の模様を知りとうございます。何とぞお聞かせ下さいませ」と、新六に懇願した。新六は、数カ月前の水戸勢と官兵の死闘を目撃しているので、その模様を語つて聞かせた。勘定方のその武士と従卒は、荒谷の戸口家に潜んでいたところを官兵に包囲され、戸口家を裸足で飛び出して官兵にたち向かつた。

「やっ」と一声発すると官兵の一人が切り倒された。多勢の官兵もこの武士の剣さばきに圧倒され、もて余しているところへ鉄砲隊が駆けつけて銃を突きつけた。武士は従卒に「逃げる」と命じ、従卒が山に向かつて逃げるのを確認すると、その場に自ら座つて着衣をひろげ「介錯頼み申す」と、言つて小刀を

腹に突き刺した。武士の背後に回つた官兵の隊長が「お見事」と叫んで武士の首を切り落とし、その首をこの家の前の池で洗い清め、武士の切腹した場所に埋めた、と説明した。

水戸の後家は、流れ出る涙を何度も拭いながら聞いていたが、懐中から数珠を取り出して暫し合掌瞑目した。傍らにいた宿の妻はシクシク貰い泣きしながら接待の準備のため席を立った。翌朝、新六は水戸の後家を裏山に案内し、首が埋められた場所を指さし「掘つてみますか」と言つた。水戸の後家は首を二度横にふり、その必要のない意思表示をしたのち、新土が少し盛り上がった地面の前に灯明をあげ、線香をたてたのち、両手を地面について、さめざめと泣き崩れた。

その後、土地の石工を頼み、その位置に小さな墓をたて、真光寺の坊さんにお経を上げてもらい、それからは毎日灯明や線香、供え物等の供養を怠ることがなかった。土地の住人も、この婦人を「水戸の後家さん」と呼んで親しみ、物心両面において援助を惜しまな

かつた。やがて四十九日の法要をすませた水戸の後家は、宿の夫婦に両手をつき「長々とお世話になりました。路銀の絶えぬ間に水戸に帰りたいと思ひます」と、永い間の厚情を謝し、宿の清算を済ませたのち、翌朝旅の支度を整えて寺沢旅館をあとにしたのである。

◆親切な峠の医者どん

その日の夕方のことである。峠の医者久右衛門の所に、峠の湯宿の主人が一人の旅の婦人を背負つてやつて来た。「医者どん、峠の山道で行き倒れの女の人を連れてきた。診てやってくれないかのう」と言つて玄関先に病人を下ろした。医者どんと湯宿の主人は、その婦人を診察室に抱き入れ、布団を敷いて寝かせた。その病人の体を念入りに診察した医者どんは「お前さんはどこの人ですか」と尋ねた。「私と別山の寺沢旅館に泊まっていた水戸の者でございます」と、息も途切れ途切れに答えた。水戸を出た時から体調が思わし

くなく、水戸に帰る途中峠を越すことができず倒れてしまったことを医者どんに話した。

医者どんは、水戸の後家の噂は聞き知っていたので、それ以上聞くことはしなかった。

「お前さんの体は大分弱っている。こんな体でよく水戸まで旅する気になったものだ。病名は労咳という難病で、これ以上無理すると死んでしまう。まだ初期のうちだから二三年気長に養生すれば治ると思う」と言い聞かせた。「長逗留するだけの路銀もありません。明朝旅立たせて下さい」「私は医者立場として死ぬのを承知で旅立たせるわけにはいきません。お金のことは心配しなさんな」と、医者どんは水戸の後家を入院加療した。十日ほどして起き上がれるまでに回復し、旅立とうとする病人を「無理はしなさんな」と押し止め、峠の湯宿に連れていき、湯宿の主人に「湯治かたがた養生させてもらいたい」と懇願した。そして水戸の後家は、無理をしない程度に湯宿の下働きをしながら、病氣治療のため峠の湯宿に住みついたのである。湯宿の主

人は、連れ合いに先立たれ、男手だけのところに美人の水戸の女が住んでいるということが評判になり、湯宿は前と変わって繁盛したのである。湯宿の主人も天から授かった宝物のように水戸の後家を可愛がり、尊敬していたのであった。そして三年が経過した。診察にきた医者どんは、水戸の後家に病氣は全快をしたと診断を下した。

喜んだのは水戸の後家であり、逆に掌中の玉を失う悲しみが嵩じて寝込んでしまったのが湯宿の主人の方であった。「お医者さまでも草津の湯でも」というように、この湯宿の主人の病氣だけは、さすがの峠の医者どんにしても手の施しようもなく、日に日に憔悴していった。人の情は通じるもので、水戸の後家は命の恩人の悲恋を見過ごすことが出来ず「私は水戸へ帰っても肩身の狭い身分、身内もおりませんので、もし宜しければ一生お側において下さい」と、宿の主人の枕元に両手をついた。たちまちにして生気を取り戻した湯宿の主人は、早速峠の医者どんに媒酌を頼

み、吉日を選んで祝言をあげた。この地方では後妻のことを後家と呼んでおり、その意味で名実ともに湯宿の後家になったのである。

以後、人々はこの湯宿を「後家の湯」と呼び、まえにも増して繁盛していった。そして大過なく数年が経過したある日のこと、三島・刈羽郷の名うての博徒が峠の「後家の湯」に参集して賭博が開帳された。

◆宿六が賭博でしくじる

もともと、この宿の主人も仲間で、賭博場の宿六として博徒仲間からは一目置かれる存在であった。この日の勝負は、一方的に勝ちまくった男がいた。大方のお客は負けて降りてしまい、最後は宿六とその勝ち運の男だけの勝負が続いた。この男は笹山に住む無類の博打好きで勝ったときは力づくでも金をとるが、負けたときは十手に物を言わせて踏み倒すことで有名であり、本名小林与三八、博徒仲間からは「オニテの熊」と言われて恐れら

れていた。彼は「倍張り」をやる。最初は少額から賭け、負けるとその倍を賭け、更に負けると負け総額の倍を張り、一度勝ち目が出ると一発で元を取り返す鬼手を用いていたのである。さすがの胴元も熊との勝負に有り金を全部はたいてしまった。「どうだね宿六さん、この辺が潮時ではないかのう」と熊は勝ち誇った。大負けで平常心を失った宿六は、止せばいいのに「待ってくれ、オニテさん。

もう一回の大勝負だ。おれはお前さんの好きなものは何でも賭ける。そのかわりお前さんは有り金全部を賭ける。倍張りはダメだ」と言っていた。はたで見物していた負け組は「これは面白くなってきたぞ」と熊の顔を凝視した。「それは面白い、後悔しなさんな、宿六さんよ」と言って勝ちまくった二十両余りの金を前に差し出し「よし勝負だ」といった。宿六が「半」といったので熊は「丁」と叫んだ。坪振りはサイコロを入れ、伏せて二、三度置の上で回しながら壺をあけた。その様子に目を凝らしていた見物の面々はアッと驚

きの声をあげ、サイの目を見つめた。サイの目は「丁」と出たのである。一瞬間が水を打ったように静まり返り、重苦しい空気がただよい、見物人み宿六の顔を見つめた。「さあ何でも好きなものを言ってくれ」宿六はヤケクソ気味で叫んだ。「それではお言葉に甘えて好きなものを頂く。あとで〔それだけは困る〕では承知しないぞ。仲間の皆さんが証人だ」「判っている。俺もバクチ打ちだ、じらさないで言ったらどうだ」「じゃあ言うぞ、水戸の後家さんがほしい」。それを聞いた宿六は青くなり、頭を抱え込んでしまった。まさか最愛の妻を要求されるとは夢にも考えていなかった。妻を連れ去られた後は首をくくって貞淑な妻に申し開きをしようと、腹を決めた宿六は「おおいオッカア、大変なことになった。来てくれや」と、調理場で仕事をしている妻を呼んだ。水戸の後家は前掛けで手を拭きながら怪訝な顔をして入ってきた。

宿六は事の仔細を聞かせ、涙を流し、腸をしぼり出すような悲痛な声で「俺は馬鹿だっ

た。勘弁してくれ」と妻に許しを乞うた。「おい宿六さんよ、俺は何も連れてゆくとは言っていない。俺はカカアに死なれて不自由をしている。一回でいい。ただ有り物を貸してもらっただけだ。さあ、後家さん」と、アゴで後家さんに別室で待つよう仕草をした。

◆生まれ変わった熊さん

水戸の後家はしばらく考えていたが「お待ち下さい。私も武家の出ゆえ、その屈辱は死ぬより辛うございます。必ず小林様の面目がたつように致しますから一日だけお待ち下さい」と熊の前に頭をさげたまま、熊の目を物悲しそうに見上げた。目と目があつて後家の気品に圧倒された熊は、黙って頷いた。

夕刻、博徒たちが解散した後、後家さんは宿六に向かって「大変お世話になりました。切なうございませうが、これでお別れです。明日と小林さんのもとへ参らせて頂きます」と、宿六の胸に顔を埋めて嗚咽した。「済ま

ない、済まない」と謝り続ける宿六に「どちらに参りましょうとも私は貴方の妻です。決して短慮なことはして下さいませう」と、気丈にも言つてのけ、宿六の手を握りしめた。二人は抱き合つたまま、まんじりともせずその夜を明かした。翌朝、水戸の後家は少々の荷物をまとめ、湯宿を後にした。途中峠の医者どんに立ち寄つて、事の仔細を説明し、湯宿の良人のことを「宜しく」と頼んで笹山小林与三八のもとに身を寄せたのである。水戸の後家は熊に向かつて「私は瘦せても枯れても武家の生まれ、二夫にまみえることは出来ません。お前様の妻ではなく、女中としておいて貰いますから、そのおつもりで」と前置きして「早速ながら」と姉さんかぶりに襷がけ「散らかしていますね」と言つて掃き掃除を始めたのである。

ところが、その後の熊は酒はもとより、博打や喧嘩は一切やめ、人が変わったようにおとなしくなり、農家の日雇いをして猛烈に働きた。土地の人々は驚き「良い女房を貰

うとこうも人が変わるものか」と感心した。

水戸の後家は、月に一回ぐらひは熊の許可を得て峠の湯宿に出向き、一晩泊まつては帰ってきた。熊も男の意地を貫き、水戸の後家とは寝所を別にし、生涯その手すら握ることなく、明治十年四月、水戸の後家に見取られて、波瀾に満ちた五十四才の生涯を閉じた。

熊の死後、峠の湯宿に戻つた水戸の後家は数年の間夫婦仲睦まじく過ごしたが、やがて良人もこの世を去つたので、峠の医者どんに別れを告げ、新六に立ち寄つた後、裏山の墓に詣でて何処へともなく姿を消した。

多分、故郷の水戸へ帰つたのであろうと、土地の人たちはその余生の幸せを祈つた。

以後、峠の湯宿は閉められ、新六裏の墓には訪れる人もなく、苔むしていった。

その後、暫くして峠の「後家の湯」は宮本村堀之内の住人によって再開されたという。

(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

歴史の外におかれた侍たち

加比 礼三

水戸郷土史家

□寡勢よく勇戦奮闘

水戸藩諸生党の越後での戦いは、慶応四年七月二十九日、与板城への猛攻撃を最後に撤退する。この日は長岡城の再落城の日にあた

る。七月二十四日の夜半、有名な八丁沖渡河の奇襲によって河井繼之助らの長岡勢は、一旦西軍の手に帰した長岡城を奪回する。しかし、西軍が城内の火薬庫に蓄え残した弾薬の大爆発が起こって城中の長岡勢は混乱し、そ

こへ西軍が猛反撃を加えたので河井も大腿部に銃弾をうけ、担架に乗せられたまま加茂に退く。その河井ら長岡勢は八月四日、八十里越えをして会津を目指す。山中に野営しながら同月六日、只見村に辿り着く。一方、水戸勢も八月四日、三条、加茂を通過、村松を経て高石に到着していたが、その先の津川は早くも西軍の制するところとなったため、これより南下して途中同盟軍と合流、長岡勢と前後して只見に入った。

これより先七月二十五日、西軍は松ヶ崎、丈夫浜に上陸し、同軍に寝返った新発田藩の手引きで新潟を攻撃し、同月二十九日には新潟を占領する。その結果、与板藩を攻撃していた水戸勢は背腹に敵をもつことになり、撤退を余儀なくされる。余談だが、この日まで寺泊方面にゲリラ戦を展開して西軍を悩ませていた水戸勢の一部を率いる伊藤辰之助は、突然消息を断った。その後、彼は越後に潜伏

して生き長らえるのだが、諸生党の隊長があるいは戦死し、刑死するなかで伊藤だけは戦犯の追及からも逃れた。そして、明治二十年ごろ堂々と名乗り出て、何事もなく静かな余生を送ったというが、その間の消息は全く不明という不思議な人物である。

これまで越後に於ける水戸勢の戦いにのみ触れてきたが、戊辰戦争は磐城の浜通り、中通り、日光口街道の沿線でも、四月以降一斉に開始されていた。緒戦、西軍はどの戦線でも東軍の予期せぬ強硬な反撃に遇って苦戦した。白河攻略を担当した薩長土肥の軍も城を攻めあぐね、五月朔日に至って漸くこれを制圧した。しかし、奪還を企てる東軍の反抗にあって、さらなる進攻には兵員が少なく、土佐の板垣は江戸の大村益次郎に増援を依頼する。これに応えた大村は千数百の援軍を軍艦三隻に分乗せしめ、海路を常陸水戸領の最北端平潟港に上陸させた。これが六月二十三日

のことであつた。この軍は九州諸藩の薩摩、熊本、柳川、大村の兵によって編成されていたが、白河の板垣らと呼応して平、棚倉、二本松、三春等の奥羽列藩同盟に与する諸藩を討伐のため攻勢に転じ、各街道を北進する。

水戸の支藩・守山藩などの小藩は、西軍がやって来ると一発の弾を發することもなく降伏してしまふが、頑強に抵抗を続ける藩もあり、西軍の作戦はなかなか思い通りに遂行できない。二本松城の陥落は平瀧上陸から一ヵ月余を経た七月二十九日であつた。各個撃破で各藩を叩きながら進むには、これから何ヵ月かかるか判らないままに戦闘を続け、冬を迎えることになれば温暖の九州から馳せてきた軍勢の最大の敵は嚴寒、積雪となる。それまでに何とか奥羽同盟の本拠・会津藩を落とさねばならぬ。作戦をこの一点に絞つた西軍は猪苗代湖の北岸と南岸の両道を突き進むことになつた。主としてこの軍を構成したのは

薩、長、大垣、大村、土佐の五藩である。

逆に東軍は、雪が降るまで頑張れば、西軍を奥羽から追い落とせると確信し「雪が降るまで」を合言葉に、八月二十一日には西軍の侵攻に備えて母成峠の嶮に陣を構えた。

しかし、これに襲いかかった東軍は物量を頼んで終日猛攻襲を繰り返し、この峠の陣を抜き、勝ちに乗じて翌二十二日は猪苗代で戦い、さらに十六橋を突破して戸の口原へと進攻する。十六橋は日橋川にかかる石橋だが、石を何個か引き抜けば橋は崩れて敵の侵入を防げる構造になつていた。西軍もこれを知つていて猛攻を加えたため、最後の一個を抜くことが出来ず後退を余儀なくされる。

先に武器、食料をはじめ諸物資の補給基地であつた新瀉港を制圧され、さらに防御の要衝十六橋を越されては、会津鶴ヶ城の籠城戦に移る以外に抵抗の道はなくなつた。

この日、戸の口原の敗報を受けた藩主松平

容保は、養子喜徳を城の留守居役として、弟の桑名藩主松平定敬とともに兵を率い、最後の防御地点滝沢村に出陣した。喜徳は水戸九代藩主・徳川斉昭の十九男で幼名は昭則、余九麿といつた。慶応三年、容保の養子に迎えられ、戦後は水戸に帰り、明治六年に守山藩の跡目を相続した人である。

□市川勢、落城の危機に奮戦

藩主をはじめ全軍が出撃して、わずか八、九名の老兵と婦女子が留守を守る本城に、何処を通り抜けたか、板垣が率いる土佐藩の一隊が年貢町方面から南門に向かつて殺到してきた。この時である。後に新島襄の夫人となる山本八重らは男装して銃をとり防戦した。

城の石垣が高く二の丸、本丸に入り込むのは困難とみた板垣勢は、土塁の所から攻め込もうと濠いに西に移動を始めた。その時、

三の丸に待機していて銃声を聞きつけた市川三左衛門の一隊が駆けつけてきて交戦となつた。やがて西郷頼母に率いられて冬坂（東山温泉付近）に出撃していた朝比奈、大森の水戸勢も急を聞いて駆けもどり、あわや落城かと思われた危機を救つたのである。会津の開城は九月二十二日であつたが、それより丁度一ヵ月前の出来事であつた。

この水戸諸生党の奮戦ぶりは、会津の宮崎十三八氏（故人）によって書き残されており、会津を救つた水戸の勇士に感謝の意を表するとともに、水戸の人たちはこの事実をどう考へているのだろうか——と結んでいる。

この書は今年の春、茨城県東海村に現住しておられる会津出身の阿部富八氏から、諸生党の後裔が結成する仰天会に届けられた。

この事実は、これまで水戸には全く知られていない。宮崎・阿部両氏に感謝するとともに、これを機に有志相図つて会津と水戸の交流を深め

ようと、前身に紹介の通り会津市における鎮魂碑
建立となったのである。

□城を枕に討死を覚悟

戦いは滝沢村でも敗軍となり、容保はあくまでも抗戦し、城を枕に討ち死にする覚悟で帰城するが、弟定敬は米沢に去らせる。

八月二十三日から城をめぐる本格的攻防戦が展開されるが、少年兵・白虎隊十六名の自刃はこの日であった。滝沢村で敗れ、ようやく飯盛山にたどりついて城を眺めると、市中に燃え上がる煙が城を覆い尽くしている。もはや落城かと勘違いした面々はここに死を選んだのであった。火は落城を防ぐため、城の北端に連なる武家屋敷を自ら焼いたものであった。西軍はこの日、おおむね城の包囲を終え、こんどは西軍が町家を焼き払い、逃げまどう者、攻める兵、防ぐ城兵入り乱れて混

乱を極めた。板垣の土佐兵一小隊約八十人は前日の失敗を省みず、朝から再び攻撃を開始して天神橋を抜き、三の丸に迫る。もし三の丸が占拠されれば、手薄な二の丸、本丸は瞬く間に占領されるであろう危機であった。

これに立ち向かった会津の兵は、隠居組と呼ばれた老兵のみであった。最高年齢は七十四歳の者まで加わった。老兵たちは奮戦するがなかなか敵を追い払うまでにはいかない。この状況を城中から見ている婦女子たちは、南門の塁上から、あたかも今日の野球の応援団のごとく、立木の幹を叩き、喊声をあげて声援した。この応援に奮起した老兵たちは、土佐兵を一步も城中に入れずに日が暮れた。

その頃になると緊急事態を知らせる半鐘の乱打で、城中には会津兵が僅かながら集まってきた。土佐藩兵は一気に攻め落とそうと、夜になっても砲戦を続け、板垣自ら抜刀して兵を督励、じわじわと城に接近していった。

しかし、暗闇では勝手知ったる城兵に有利、密かに城を出て土佐兵が間近に迫る頃合いを計り、突如、喊声をあげて襲いかかれば、慌てふためく土佐兵は真っ暗闇で逃げる方向を失い、後ろから来る友軍を追手と間違ひ、同士討ちに果てる者まで出る始末で、二十三日は西軍の散々な敗戦に終わった。

□奇策の敵前入城

その後も熾烈な攻防が続くが西軍が決定的な戦闘を挑むには増援を待たねばならない。

会津側も各街道に出撃している兵を呼び戻す。これらの兵は、市外のある場所に待機して逐次帰還の兵を待って大きな集団を作る。

そして、大集団になると西軍を威嚇して堂々と入場する。日光口を防いでいた山川大蔵の一隊のごときは、城が近くなると若松地方に伝わる「彼岸獅子舞」という郷土芸能の獅子

舞を先頭にして、太鼓と笛ではやし立て、整然と隊伍を組んで城門へ進んだ。これはいったい何事かと思議に思った西軍が攻撃を忘れて眺めているなかを、まんまと城に入ってしまった。かくして城中には五千有余の兵が集まってきた。

城中には米、塩、さらには乾物等、十分な蓄えがあり、雪がくるまでの戦闘を維持できるだけの備えはあった。持久戦はこれからが始まりである。八月二十五日中野竹子らが奮戦する柳橋の戦い、二十七日小田の戦い、二十九日長命寺の戦いと続き、九月に入る。

九月二日、水戸勢の隊長の一人、大森弥三左衛門（家老）が戦死する。大森の従卒は主人の首が西軍にわたるのを恐れ、自ら主人の首をはねて、その場から逃走、密かに水戸に持ち帰り、水戸郊外の常照寺に仮埋葬した。

この状況下、市川三左衛門は諸生党の水戸帰還を決意する。九月四日、喜徳公にお目通

りを願ひ出てこの旨を告げる。喜徳は、自らの郷里である水戸の將兵の奮戦に感謝し、杯を賜り、手厚く饗して決別の言葉を述べた。

佐川官兵衛は、途中の安全を確保するためにと水戸勢とともに城を出た。これ以降官兵衛は城へ戻らず、城外で戦うことになる。

翌五日、西軍は日光口より城下の材木町を目指して侵攻してきた。これを察知した市川は、帰還を前に佐川隊と二手に分かれ、佐川らは住吉神社の森から秀長寺の墓地内に潜んで、西軍の接近を待ち伏せ、水戸勢は大川の堤の下に隠れて、佐川の戦いが始まるのを待った。大川は只見川に流れ落ち、阿賀野川に入る上流の川で、急流のうえ水量も多く、橋がない。やっとの思いで渡河し、秀長寺に辿り着いた鍋島、芸州、彦根の西軍は東軍の潜んでいるのも知らず、ここで休息に入る。東軍とき距離はわずか三〜四十間、西軍が備えを解いて休息に入ると秀長寺内に備えていた大

砲が火を吹いた。これを合図に三方から突撃に移ると驚いた西軍は戦うことも忘れて、一斉に大川目指して逃げ出し、運んできた鉄砲はもちろん、食料、弾薬、さらには軍用金までも置き去りにしていった。この分捕り品はそっくり城内に運び込まれた。

一旦、水戸帰還を決意した水戸勢だが、この戦いに勝って、進路は水戸へ取らず、佐川の兵と合流して、ようやく八十里越えを突破して越後から入ってきた山県軍を迎撃するため高田に転進する。この付近での戦闘も連戦連勝で、分捕り品は前回同様、会津の城に送り、物資の補給にあてた。

九月十六日、人皇村にむかった西軍のなかに、遺留品から水戸の天狗党の一隊が加わっていることを知った市川勢は、天狗を討ち取らんと猛烈に突き進んだため、この気迫に押された西軍は敗走し、天狗と諸生の決戦は会津の地でも行われることはなかった。

□米沢藩主が説得、会津開城

この間、会津市中では連日凄まじい攻防戦が繰り返される。十四日、西軍は包圍攻城軍に一斉総攻撃を命じた。城兵の死傷者も続出し、城内は混乱を極めたが、城内にいた婦女子もかいがいしく働き、傷ついた兵の手当てで血に塗れた手を洗いもやらず玄米の握り飯を作り、さらには弾拾いという危険な仕事にも積極的に加わった。弾拾いとは、打ち込まれた大砲の弾が爆発しないうちに濡れた布を被せて取り押さえる命がけの仕事である。女性たちが押さえた弾を、こんどは味方の大砲で敵に撃ち返すということになる。

この悲壮な戦いを目の当たりにした板垣退助は、米沢藩を説いて会津に帰順を勧めさせた。二十日、容保は降伏書を米沢藩を通して提出し、二十二日に開城と決した。

城には男女、老幼、兵士らを合わせて五千二百三十二人、兵器と大砲五十二門、小銃二千八百四十五挺、弾薬二十三万発が残されていた。まだまだ戦う余力はあったが、雪をまてずに降伏となった。二十三日、城内全員の退去が始まる。山本八重は落城の無念を、「明日よりは何処の人が眺むらん慣れし大城に残る月影」と白壁に書き残して去った。

水戸の諸生党は、頼りにしていた会津藩の戦況が思わしくないのは知っていたろうが、彼らにはまだ成さねばならぬことが残されている。市川勢は佐川と別れ、高田を去って間道伝いに水戸へ向かって行軍を開始した。

(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

歴史の外におかれた侍たち

加比礼三

水戸郷土史家

◇諸生党 会津から水戸へ帰る

会津城は九月二十二日開城と決する。西軍の本格的城攻めは八月二十三日であったから、一カ月の籠城戦であった。この間、中央政府は慶応四年九月八日をもって明治と改元。したがって会津戦争は慶応から明治にかけての戦いとなる。会津に与して頑強に戦った水戸・諸生党の市川勢は、会津の開城に先立ち「まだ成さねばならないことがある」として、隊をまとめて水戸へ向かって行軍を開始した。現在、会津に残る水戸藩諸生党の戦いの記録は、高田付近の戦

闘を記録した九月十八日までであるから、市川勢が水戸へ向かって出発したのは、同月二十日頃であったろう。越後から撤退して会津にたどり着いた時は四百余名の軍勢であったが、このとき水戸を目指した市川勢は三百名を切っていた。しかし、そこには会津、長岡の藩士も加わっていたので、総計五百位の兵力を維持して水戸への道を進むことになる。

間道伝いに田島村付近まで来て、斥候を放つと、中山峠には西軍が駐屯していて日光口街道は嚴重に取り締まられていることが分かった。一行は田島を避けて東方の山中に進路を変えて進むうちに田島村の自警団に出くわす。彼らは西軍の侵攻かとみて警戒緊張するが、市川勢の旗印を見て、水戸の軍勢であることに安心し、道案内をつけて栗生沢まで誘導する。この日、九月二十三日、一行はここで前日の会津開城を知るのだが、その頃、会津には約百名の市川勢に取り残された水戸藩士がいて、去就に悩んでいたのだった。市川勢は、別に見捨てたわけではなかったのだが、連日の激闘と混乱のなか、お互いに連絡がとれず、離れ離れになってしまったのだ。いままさら水戸へ帰還する本隊を追って合流も叶わず、やむなく榎本武揚のいる北海道に渡り、再挙を図る決意を固めて行動を開始する。しかし、指揮官のいない悲しさ、追々分離して、仙台に入ったころは捕らえられて刑死するもの、あるいは函館で戦死するなど、いずれも憐れな最後であった。

だが、その中の二十六名は鶴岡藩の軍に加えられて余命を保つことができた。戦後、水戸藩から諸生党狩りが庄内にやってきたが、水戸からの身柄引き渡し要求に対して鶴岡藩は、この一団の存在を秘して応ぜず、のち秘かに江戸へ逃がした。

一方、栗生沢に着いた市川勢は、ここで馬三頭と食料とを交換して、隊士にたらふく食べさせて、二日間の休養をとる。この間、おくれて江戸から会津に向おうとしてやって来た二十数

名の新撰組の隊士と出会う。この話は、子母沢寛著「新撰組聞書」の中の「稗田利八思い出話」の項に詳しく伝えられている。この新撰組の隊士は方向を変えて、市川勢とともに水戸を目指すことになる。

二十三、四の二日間、充分に休養をとって元氣を取り戻した一行は、二十五日の朝出発するが、一行に好意的な栗生沢の人たちは各戸から一人ずつ使役を出して、山越えと道案内を手伝ってくれることになった。男鹿岳（標高一七七メートル）の肩まで来ると、那須の連山は一望のうちであった。ここから三斗小屋宿を経て黒磯に通じる道があるにはあるが、大田原の藩兵が一带を準備している。僅かな守備兵であるから水戸への行軍を急ぐ諸生党は、これを蹴散らすのは容易だが、衝突を避け、木俣川に沿って山中を進み百村（むむら）に至る。

途中、隊士の一人が病気で歩行困難、息も絶え絶えなうって苦しむが、もはや助かる見込みはないとみた戦友の一人が、これを斬り、遺体を谷底へ捨てるという悲惨な出来事もあった。

山越えでは、この犠牲者が一人あっただけで、一行は親切に送って来てくれた栗生沢の衆に別れを告げ、ここに一泊することを決めた。百村は大田原藩領内である。当然、同藩の物見は諸生党の動向を探り、藩庁へ報告している。報告はたしかに寄せられたが、情報が混乱して水戸の軍勢は総勢千九百六十人もの大軍と伝わり、これらの軍勢が大田原城を攻撃の模様ということになってしまった。周章狼狽した大田原藩はなんとしても小藩の悲しさ、おまけに会津攻略に兵を送っており、留守部隊だけでは支えきれぬものではない。幸い、領内の光真寺に会津に向かう彦根藩兵が宿泊している。また市野沢村には阿波藩兵が滞在していた。これらの藩兵に水戸勢邀撃を依頼し、また隣の黒羽藩にも参戦を要請する。この藩も事情は同じであった。

同藩主は大関氏、大田原藩主は大田原氏であり、この地方では源平の合戦に那須与一を出した

那須氏と並んで、中世には下野の三人衆として君臨していたが、この頃の祿高は黒羽一万八千石、大田原一万千四百石の小藩であった。

◇戦い上手の市川勢

黒羽藩は兵員が少ないのを補うため、商人や農民の志願兵を募り、有事に備えて訓練をしていた隊があったが、この藩から戊辰戦争に参加した兵の総数四百十七人のうち、半数はこれら民間の志願兵であった。そして、いま、これらは大半が会津へ送られていた。しかし、事情はどうあれ、侵入の敵は追い払わなければならない。阿波、彦根、大田原、黒羽の四藩は、二十六日、大田原に集まって軍議を開き、この日の水戸勢は下石上村に宿泊するという物見の報告に基づき、この夜九ツ（十二時）を期して寝込みを急襲して撃滅しようとした。

四藩そろって出撃するのだが、水戸勢は夕食後、松明をともして薄葉村から小種島方面に進んで行ったため藻抜けの殻で、空振りとなり、改めて作戦の立て直しという結果に終わった。市川の軍勢は、夜行軍の際、松明を一人で二本も三本ももって歩くので、夜の物見には実際の数よりも三、四倍にも見えることになり、いかにも戦馴れしたたかさが窺える。

小種島は、箒川を挟んで片府田の対岸である。ここで一行は箒川を渡河して片府田に入り、同夜はここに宿泊する。隊を三つにわけて上の集落、下の集落さらには宝寿院に分宿するが、翌朝、一行は四藩連合の攻撃に遭う。二十七日早朝、連合軍は片府田の北、二階林に到着したするが、物見の報告によって宿泊している民家の軒先に立ててあった槍の数から、大軍ではなく四、五百の少ない兵員であることが確認された。この報を受けた四藩連合は勇躍して、素早

く行動を開始した。宝寿院の前には蛇尾川から灌漑用水をひく堀割があったが、稲刈りも済んで水はなく、恰好の塹壕となっていた。この堀を進んだ大田原兵と彦根兵は宝寿院の門前、二十五間のところまで進む。一方、同院の裏手には、少し離れて阿波兵が陣を構え、更に黒羽兵は市川勢の退路を遮るよう佐良土うえに大砲まで引き出して待ち伏せ、完全に市川勢を包囲する陣構えができた。市川勢はまだ気づかず、朝食の準備をしていた。

夜が白みかけるころ、まず宝寿院の門前の物見が斬り殺されたところから戦闘開始となる。敵の来襲に戦い馴れている市川勢は素早く応戦、わずか三間の道を挟んで両軍は対峙した。しかし、至近距離の戦いであるため銃撃戦にはならず、切り合い、突き合いの白兵戦が演じられる。この戦闘で、大田原藩の軍監として参戦した阿久津又次郎忠順という侍は、二刀流で奮戦するが、市川勢の狙撃兵の発する銃弾に胸を射抜かれて敢えなく息絶える。

隊長の戦死に怯んだ大田原兵は正攻法ではかなわぬとみて、隊を二手に分け、一隊は裏手に回って挟撃を図った。裏手に陣していた阿波兵は、積極的には戦わず、遠くから銃撃をするだけだったが、突然目の前にあらわれた大田原兵を敵と勘違いした阿波兵は、この隊をめぐって猛烈な銃撃を開始する。これではたまったものではない。大田原藩の中津川嘉秀という一兵卒が阿波の陣地に駆けつけて銃撃を止めるよう申し出るが、なんと阿波藩の隊長は「兵卒の身分で、かかる抗議を申し込むとは無礼である」と大いに立腹して、兵を退き、これ以上戦わず、両軍の戦いを傍観するだけであった。したがって彦根藩は、この戦いで四名の戦死者を出しているが、阿波藩は一人の戦傷者もいなかった。

ここ片府田の戦いは二時間に及んだが、市川勢は敵の混乱に乗じて包囲網をかくぐり、箒川沿いに佐良土に退いた。

片府田で、市川勢には十一名の戦死者があったが、ここも会津同様、戦死体を収容する暇はなく、放置されたままであったが、こここの集落の人たちが、大田原藩兵に気づかれぬように収容して宝寿院の裏手に埋葬した。

明治二十一年になって村の女人衆が供養碑をここに建てて、戦死者の霊を弔ったが、この供養碑はいまも残されている。

佐良土は現在の湯津上村であるが、箒川を挟む対岸は小川町である。箒川はここで那珂川に合流するが、那珂川を渡れば水戸領馬頭である。

水戸への道を急ぐ市川隊は、こんなところで戦って手間はとってられない。佐良土に待ち伏せしていた黒羽藩兵の邀撃には数名の銃撃兵を残して、本隊は堂々と隊伍を整えて小川に撤退してしまった。渡河を援護した市川勢の兵三名がこの地で犠牲になるが、黒羽藩は佐良土の集落の大半を焼き尽くしてしまう。

この地点は、現在、箒川に橋がかけられ小川町と湯津上村をつないでいるが、佐良土側の橋の袂の馬頭観世音の傍らには、地元有志により水戸の戦死者三名の墓が造られ「戦死者」の三文字を刻んだ小さな碑が建てられている。

◇水戸城の決戦間近

小川から那珂川を渡河した市川勢は、いったん小砂（こいさご）に集結して軍議をし、水戸への進路を定める。ここからは、兵を二つにわけて、一隊は猪飼伝衛門（水戸藩元大目付）を隊長として大子を経て水戸に向かい、市川等本隊は鷺子村（とりのこむら）を通り、那珂川

に沿って水戸へ進むことになる。この地帯は、水戸領内では比較的諸生党のサポーターの多いところである。慶応四年三月十日、市川勢が常陸太田を出発するとき軍資金を提供して、この軍勢に加わった薄井友衛門については先に紹介したが、薄井一族は友衛門を中心として紙問屋や砂金の採集などを行い、水戸領の長者番付には兄友衛門の大関、弟七左衛門の前頭と、並び称せられる富豪であった。この財閥一族はこぞって市川勢に加わり、越後、会津を転戦して、この日半年ぶりに故郷に戻ったのであった。しかし、戦いはまだ続く。やがて最後の敗戦で、一家離散、この日を最後に彼ら一族は再び鷺子へ帰ることは出来なかった。

欠所となった薄井家の豪邸は取り壊されて、いまは耕地になっており、かつての薄井家の繁栄を偲ばせるものは何一つ残されていない。七代続いた薄井家は幕末の動乱で消えるが、七代目友衛門部の娘・としは江戸で結婚、その後が沢村国太郎、同貞子、加藤大輔らで津川雅彦、長門裕之と続く名優一家となっている。

この年九月の改元で、一行が鷺子に一泊したのは明治元年九月二十七日になる。翌朝鷺子村を発ち、水戸をさして那須街道を南下し、大岩村の入口三賀峠に差しかかると、この村の郷土竹内源介は近隣の獵師や農民を集めて、市川勢の進入を防ごうと待ち構えていた。竹内勢は峠の上から襲いかかるが、百戦錬磨の戦鬪集団と獵師、農民の俄軍団では戦う前から勝負は決まっており、竹内勢は戦死者一人を出して敗走する。市川勢は、そのまま長倉、野口を過ぎて那珂川べりを下り、小野河原まで進む。この時、対岸の御前山には大森多膳の率いる水戸藩兵が対峙していた。しかし、この兵は市川勢を攻撃しようとはしない。多膳は、会津で戦死した大森弥三左衛門の本人である。弥三左衛門の戦死は前述の通り、八月二十二日であったから、多膳にはまだその報せが届いていなかったであろう。本家と分家が争うことを嫌ったようである。

思想信条の違いから親子、兄弟、親戚が諸生、天狗に別れることもあったが、政情不安の混乱期を、家名を残し、財産を守り、生き残る手段として、相談ずくで別れてどちらかの派に乗るといふこともあったようである。

農民でも諸生に与し、逃げだすときは天狗派の縁者に系図、位牌をはじめ財産を預けて逃亡し、欠所を免れた例はたくさんある。侍も農民も家門を絶やさぬ知恵であった。

小野河原に到着した市川らは大子を回って水戸へ向かった猪飼隊をここで待ち受け、合流して那珂川を渡った。

対岸は下阿野沢（現在の桂村）である。御前山に陣をしいている大森多膳の隊は、この諸生党の動静は手にとるように分かるのだが、依然として動かない。阿野沢から水戸へは一本道である。この辺までやっていると、この隊に参加して活躍した農民兵のなから多くの脱走兵が出はじめた。故郷に帰り着き、家族恋しさから逃げたのであろうが、彼らの大半は家に帰ることも出来ず、捕らえられて殺されることになる。群れを離れば死が待つのみであった。

一方、諸生追討のため北越方面に出ていた天狗派の将兵は、市川勢が水戸に向かっていくという情報を得て、水戸への帰路を急いでいた。

市川勢の水戸侵入に対して城を守る側は一向に態勢が整わず、市川勢の方が作戦は見事であった。石塚あたりで一夜を明かした市川勢は水戸城へ進み、やがて壮絶な戦いが始まる。

諸生党の軌跡を追う

歴史の外におかれた侍たち

加比 礼三

水戸郷土史家

水戸城の攻防

会津落城は明治元年九月二十二日だった。水戸諸生党の市川勢がこの方面の戦闘に見切りをつけ、「まだ成さねばならぬことがある」

と、総勢約五百の残存勢力を擁して水戸へ返って返したのは、その直前のことである。

同月末水戸領内に入った。水戸城外の石塚を通り、飯富村を過ぎて金沢坂を登ると上の台地が水戸である。しかし、金沢坂の上には水戸藩兵が僅かながら市川勢の侵入を阻もう

と待ち構えていた。ここでの戦いを避けた市川勢は那珂川沿いの台地の崖下を進み、谷中の下までやって来た。先に三隊に分けて編成しておいた一隊はそのまま台地の下を進み、水戸城を目指す。市川らは谷中の坂を駆け上がり、常盤共同墓地内の狭い墓参道を馬喰町口へと進んで城内への侵入を図った。

この墓地は、水戸二代藩主光圀が寛文六年（一六六八）に藩士たちの墓地として定めたものであった。水戸市街は上町と下町に分かれているが、上町に住む藩士はこの墓地を使用し、下町に住む藩士は酒門共同墓地が与えられて今日に至っている。市川らが通行した墓参道には黄門漫遊記の「助さん」のモデルである安積覚や藤田東湖の墓などが立ち並んでいる。この地点から水戸城までは三キロの距離である。しかし、ここから城へ攻め入るには、もう一つの難関を越えねばならない。

当時、現在の栄町は外濠であり、濠の内側には土塁が巡らされていて、ここからが城中だが、本丸までは侍の屋敷街となっており、市街地を制圧するには困難が予想された。

だが、別の隊は風呂の下から田見小路を抜けて三の丸へ迫る。

そして、志水陸一郎の率いる一隊は那珂川沿いをさらに東進して大杉山口へ近づいていた。幸い、市街地は静まり返っていて、城兵たちの抵抗はなかった。まんまと水戸城の本丸を三方から取り囲むことに成功した市川勢は明治元年（慶応四）十月一日の早朝、水戸城を奪取すべく総攻撃を開始した。この日は天気晴朗にして風もなく、小春日和の平穏な日であったが、両軍の撃ち合う銃声はお城の森に轟き、壮烈な攻防戦が展開された。

城の北側には那珂川が流れており、城壁との間は下町と上町をつなぐ道が通っているだ

けの狭隘な地形であり、守るに易く、攻めるには困難な一角であった。陸一郎の隊は、ここから果敢に城への突入を行った。城兵は一斉に銃弾を浴びせる。しかし、怯まずに進んだ七、八名が史館の庭に突入した。

史館とは、二代光圀が大日本史を編纂するために設けられた彰考館である。この庭に入るや、大勢の城兵に取り囲まれて斬り合いとなり、志水ら全員は討ち取られた。

この戦いでは、市川三左衛門の長男市川主計弘継もあえなく戦死をとげる。市川勢本隊は大手門に襲いかかるが破ることができず、弘道館を占拠して立て籠もる。弘道館は水戸九代藩主斉昭(烈公)が創設した藩校で、元治甲子の年、藤田小四郎らが筑波山に旗揚げした際、ここに学ぶ書生たちを主力として部隊を編成し、その討伐に向かったのが市川であった。以来、市川に加担する勢力を諸生党

と呼ぶようになったのである。

徳川慶喜が江戸開城後、弘道館の至善堂に謹慎したことはよく知られているが、彼が水戸に滞在したのはこの年の四月であった。

四月は、市川勢がようやく越後に到達したころであったが、慶喜はすでにこの時「市川らはいずれ水戸に帰り、水戸城乗っ取りの戦いを挑むであろう」と予言していたが、水戸藩の内訌を鎮静する策は示さずに駿河へ移ってしまふ。水戸城の攻防戦が始まったという報が伝わり、この防衛戦に参加しようとする郷土や農民が集まってきた。その中には勇ましい女性もいた。鷲子(とりのこ)村の郷土岡崎次郎左衛門の娘マツは、男に勝る気概の持ち主で、乗馬と薙刀の名手であり、城兵に協力して奮戦、後に文明夫人(烈公夫人)から褒詞と下賜品を載っている。

諸生党の側にも、弘道館の門前に立ちはだ

かり城兵の攻撃を阻んだ女性もいたが、所詮こちらは敗軍の兵、名前は勿論、いずれの妻女であったかも伝えられていない。

諸生、利あらず

城の南、柵町木戸口より突入を図った朝比奈弥太郎の隊も、城兵の固い守りに遮られて後退、弘道館の市川らと合流する。一日目の緒戦の奇襲作戦は、兵力の違いは如何ともしがたく失敗に終わった。翌日は、双方とも攻撃をしかけることもなく休戦となった。

時をかせいだ城兵方には会津方面に出征していた隊も帰着して増強されたのに対して、市川勢は、兵員はおろか兵糧も弾薬も補給の当てはなかった。再度、城に攻撃を仕掛けるかどうか、軍議が続く。三日目の夕刻、市川勢壊滅の準備が整った城兵側は、大手門を開

き、市川勢が宿営していた弘道館と家老中山備前守の屋敷に攻撃をかけてきた。

多勢に無勢、支えきれない市川勢は中山邸に火を放って逃げ出した。この火は弘道館に燃え移って建物の大半は焼失し、現在残っているのは、慶喜が謹慎をした至善堂を含む一区画にすぎないが、今日でも門や玄関先にはこの時の銃弾の跡があり、激戦の模様を窺い知ることができる。

市川勢には長岡藩兵、新撰組隊士、会津藩士らが約百名ほどついてしたが、彼らはこの戦いには参加せず、傍観しているだけであった。三日間に及んだ攻防は、城兵側の勝利で決着するが、双方に多数の戦死者がでた。市川方は前述の長男に加えて次男の安三郎をはじめ六十八名が戦死、城方は指揮官の鮎沢伊太夫以下八十四名の命が消えた。弘道館の戦いに敗れた諸生党は、脱落する者が逃亡を企

てて崩壊の危機に陥った。

水戸を離れて北越会津に戦い、再び郷里水戸に戻って最後の戦いに敗者となった者たちには、もう逃げ延びる先もない。ただ西の方へと三々五々散っていった。この落武者の中には佐々木雲八郎という神道無念流の達人がいた。彼は、元治甲子の天狗党との戦いにも伊藤辰之助とともに活躍して、諸生党三勇士の一人に数えられた剛の者であった。

佐々木は大塚村（現水戸市大塚町）まで落ちてきて同行三人とともに飯村善造という者の家に匿われる。しかし、追手の捜索は厳しく、飯村家にもやって来て佐々木らの引き渡しを迫った。ここは飯村の機転で捕吏を追い返すが、飯村家に迷惑を及ぼすことを恐れた四人は密かに飯村家を抜け出し、同村の鯉淵家の裏山で同志の三人を紹介し、自らも切腹して三十三歳の短い人生を終えた。

また脱落した中で荻庄左衛門（五十八歳）

は長男勇太郎（三十六歳）とともに荻家の菩提寺の本行寺で自刃した。次男昇介は越後権谷で戦死しており、荻家は一家三人がこの戦争に殉じた。逃亡して生き長らえた者もいたであろうが、その中には市川勢について水戸までやって来た会津藩の侍がいた。名を高橋外記という。水戸で弘道館の戦いを目撃しつつ、戦いを諦めて脱落した者だが、会津藩の家老であったと伝えられている。この遠来のお侍は、北川根村（現友部町）まで来て、お寺の和尚の世話になり間もなく出家する。

明治五年となり、学制令が発令されると、この村にも小学校が設置されることになったが、高橋はその初代校長に推されて村童の教育に尽くした。水戸近辺では他国者は排斥される土地柄であるが、この侍はよほど学識もあり、人格も優れていたであろう。戦乱を

くぐり抜け、余生を他国で静かに送ることのできた珍しい事例である。

小笠原に共和国の夢

水戸城の奪取に失敗した市川勢は、十月三日の夜、水戸を捨てて南の方長岡村（現茨城町）へと落ちて行く。城内では早速追討の軍が編成される。この隊は純真隊と呼ばれた。

純真隊は、一番隊から三番隊までの三隊編成で、大砲隊、小銃隊、槍隊、更には海戦に備えて軍艦の兵まで加え、輜重、会計を入れると総勢五百余人の大部隊であった。逃げる市川勢は戦死者や脱落者を除いて、わずか百二十名になってしまっていた。市川勢には弘道館の戦いを傍観した長岡藩兵や新撰組隊士たちが依然として行動を共にし移動していた。度重なる敗戦にもこの一行は諦めること

なく同行し、前途に壮大な夢を抱いていた。

それは、銚子港まで行き、大きな船を調達して小笠原に渡り、共和国をうち立てようというものであった。市川は、どこで学んだかは不明だが、初歩的なフランス語の読み書きができた。したがって、西欧の政治事情にも通じていたのであろう。函館の榎本武揚にはフランスの軍人がついて指導していたが、尊皇攘夷の本山水戸に西洋人の指導者がいたことは聞かない。市川勢は銚子を目指す。長岡村、紅葉村を過ぎて霞ヶ浦の湖岸・玉造に達すると、湖を下る船を数艘借り集め、これに分乗して水路を銚子の港へと向かった。

彼らの動きは見事というほど素早かった。これに追いつけない仲間の何人かは霞ヶ浦や北浦の湖岸の道を伝って南へ走ったが、力尽きて野垂れ死する者あるいは農兵に討たれて果てる者、本隊に合流できた者はなかった。

籠ヶ浦から常陸利根川を抜けて利根の本流に入ると対岸は小見川である。ここで上陸を試みるが、小見川は藩主内田正学一万石の陣屋である。藩兵は突如現れた軍勢の船を怪しんで一斉に砲撃を開始した。上陸を阻まれた市川勢を乗せた船は、止むなく流れにまかせて利根川を下り銚子に上陸した。

この地は上野国高崎藩八万二千石、松平右京亮の飛び領であり、上陸すると一行は直ちに高崎藩兵に取り囲まれてしまった。高崎藩は一行に降伏を勧告する。これに応じて此処まで市川勢と共に苦勞してついできた長岡藩兵や新撰組の隊士たちは、この勧告を受け入れて、あっさりと降伏してしまふ。その数は八十九人と記録されている。これらの侍は水戸の追討軍に首実検され、水戸人でないことが分かると江戸の小伝馬町に送られて、後に釈放され生き長らえることができた。

残った市川勢は百十三人で、うち二十七人は負傷兵でモッコや担架で運ばれてきた。

一行は更に敗走を続けて飯岡へと移った。ここまで来て再度降伏の勧告を受ける。協議の結果、取り敢えず追討軍に軍使を送り、停戦の条件について交渉することに決した。

交渉役を選ばれたのは大森金六郎という侍であった。この侍は十石四人扶持で馬廻組に属する軽輩であったが、水戸藩五奸の一人とされた大森弥三左衛門の分家筋で名門の出、学識もあって、特に弁説に長けていた。

それ故、交渉をまかされて銚子の追討軍の陣に向き交渉を続けていたが、追討側の提示する条件が大森の独断では返答しかねるものであったため、自軍に帰り相談の上後日改めて回答すると答え、後に向きをかえて歩き始めた。そこを、いきなり銃撃されて即死してしまふ。軍使を後から狙撃したこの卑劣な

行為に、いったん停戦に応じようとした気運は吹っ飛び、徹底交戦に決した。一方、純真隊三軍は全員銚子に集結して追撃体制を整え、進撃を開始する。これをかわして市川勢は移動し、十月四日、八日市場村へ入った。この村の籠園山福善寺を借り受けた市川勢は、まず負傷兵を運び込み、この寺に陣を構えた。翌五日の夕刻まではしばしの休息ができたが、追撃の隊は刻々ここにも迫ってきた。

いよいよ最後の決戦になるであろうことを覚悟した市川は、この夜、これまで半年の長い間生死を共にした同志全員を集めて最後の会談を行った。朝比奈弥太郎は「最後の一戦に死して武士道の最後を飾ろう」と主張し、全員がこれに和して明日の命を朝比奈に託したが、市川は人命の尊さを説き「逃げて生き長らえれば、必ず新しい暮らしよい時代がくるであろう」と懸命に説得し、残った軍用金

を均等に分け与える。そして、まず負傷者から密かに各方面に散らしたのであった。

この年三月、常陸太田を出て会津を目指した際には六百の軍勢であったが、いまここで戦える兵は僅か九十八名。戦いは攻めるより撤退の方が難しい。この逃亡が追討軍に気づかれぬよう殿軍には朝比奈、市川を始め約三十名が踏みとどまり、翌六日の戦いを待つことになった。
(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

歴史の外におかれた侍たち

加比 礼三

水戸郷土史家

緒戦には勝つが、なにぶんにも小勢の悲しさ、押し返されて敗退を余儀なくされる。

城攻めが慶応四年十月一日、同三日水戸を捨てて長岡村（現茨城町）方面に落ちるが、城方は追討軍純真隊を編成して、追撃は急を告げる。市川勢は霞ヶ浦を過ぎて利根川を渡

■諸生党の最後■

越後・会津方面に転戦して利非ず、本丸の奪取を目指して郷里水戸へ戻った市川三左衛門ら諸生党は、歴戦のいくさ上手で、虚を衝

り銚子に向う。銚子に出たのは、ここで船を仕立て、小笠原島に渡って新しい共和国の建設を企図したのだが、船がなくて挫折。四日には下総・八日市場村に入る。途中、水路もあったが、二日間で二十里近くを踏破したのは驚異だ。半年前の同年三月、会津を目指して常陸太田を發した六百の軍勢が、今わずか九十八名。もはや健軍とはいい難いこの集団の恐るべき気力と体力であった。村内の籠園山福善寺を宿所に借り受けた市川勢は、五日を休養にあてる。翌六日には敵の追撃が予想されたが、まさに慶応四年（明治元年）十月のこの日が、諸生党最後の決戦となった。疲れを癒した市川勢が、福善寺の庭で昼飯の支度をしているところへ見張りからの報告入った。敵の純真隊が迫って来るといふ。直ちに戦闘態勢に入るが、市川は、ここで

戦っては市街地に迷惑が及ぶと憂い、隊を人家のない松山村へ移動して小高い丘の上に布陣する。少ない兵を三隊に分けて邀撃態勢を整えているところへ、純真隊の一番隊が、追手の総指揮でもある尼子扇之助を先頭に襲いかかる。銃撃に加えて大砲も撃ち出すが、音の凄まじさの割には狙いが定まらない。弾はとんでもないところへ飛んで一向に役にたかない。それに反して諸生の兵は百戦錬磨、撃ちだす鉄砲は的を外さない。寄手は負傷者続出でひるむところへ十人ほどの小人数で斬りこみをかけると尼子の軍勢は総崩れとなる。緒戦の勝利は市川勢には毎度のことだが、兵力のない悲しさ、二の矢が継げない。軍を建て直した尼子は、地理に詳しい地元の家内人を雇い、市川勢の背後にも兵を廻して再度攻撃を開始する。腹背に敵を迎えては

たまらない。とぐに大砲に散弾をこめたのが威力を発揮し、大勢の討死、負傷者がでて戦闘力は全く失われた。この時、市川三左衛門はただ一人、堂々と名乗りを挙げて寄手の群に斬りかかると、その形相に怖れをなした兵たちは敗走した。市川の奮戦ぶりは、あたかも楚の項羽（紀元前二百年頃、中国の戦国時代）の烏江における最後の戦いにもたとえられた。ライバル・漢の劉邦に攻められて楚軍は漢軍にくんだり、項羽は孤立して夜半城外から流れてくる楚歌におどろく。“四面楚歌”の由来だが、項羽の武勇を恐れた漢軍は遠巻きにするばかり。項羽は漢兵の中に同郷で顔見知りの呂がいるのを見つけて「呂ではないか。わしの首には大きな懸賞金がかげられていそうだが、この首はお前にやろう」と叫ぶや、刀を自らの首にあてて果てた。

市川は項羽とは少し違う。寄手を追い払うと自分も逃げ出した。市川の首にも懸賞金がかげられてあった。諸生と天狗の決戦は半日で決着がついてしまい、純真隊の一部は落人狩りに散ってゆく。

■天狗の狼藉■

翌七日になると純真隊は、この地近隣の村名主、福善寺の院代、寺男ら八人が荒縄で縛り上げて陣屋に連れてきた。この者たちは、官軍である純真隊に協力しなかったという罪状により、全員の首をはねると公表する。

驚いた村役人が集まって相談し、死罪を免じるよう嘆願するが聞き入れられない。そこで献金をして許しを得ようと、純真隊の大目付中村忠衛門に願出た結果、見舞金として

五十両、さらに五百両を献金して漸く放免されることになった。

勝ちを奢る天狗・純真隊の略奪が続き、商店は雨戸を固く閉ざし、外出するものもなく静まり返っていた。しかし、彼らは雨戸を蹴破って侵入し、手当たり次第に物品を強奪して回り、白昼、婦女を犯すものまで現れた。純真隊が引き揚げるまでの十日間ほど、平和な村は地獄の様相を呈した。したがって、この地では、天狗に対する恨みは深く、逆に諸生党への同情が高まっていた。

地元の人々は、この地で戦死した二十五名の遺体を収容して松山台に埋葬し、脱走塚と名付けて墓地を作った。いまでも手厚い回向が続いている。戦死者二十五名の死体には首がついていなかった。二十五の首は水戸へ送られ、上市の泉町高札場と下市・七軒町の二

箇所にかけて晒された。

さて話は松山から逃げ出した市川に戻る。

六日の戦いで三左衛門は右手に深手を負っていたが、負傷にもめげず富岡、飯倉を経て蝗山いうところの道祖神のある藪に身を潜めて日の暮れるのを待った。暗くなると藪を抜け、かねて知り合いだった西高野の大木佐内なるものの家を探しあてて辿り着く。

市川の様子に驚いた佐内は、取り敢えず物置に匿って疵の手当てをし、元気回復を待った。天狗派では先の二十五名のなかにも市川の首がないので、まだ生きているのではないかと考え、首に懸賞金五両をかけて探索の者たちを励ました。追手の探索は厳しく、大木宅も危険になってきたので、少し離れた人目につかない山中に小屋を作って、暫くはここに潜伏した。やがて右手の疵も癒えたので、

江戸に潜入することになり、ある夜、唐辛子売りに身を変えて江戸を目指した。途中、市川村の宿に泊まったところを役人の宿屋改めに遭い、危ないところを逃れるが、ここまで一緒に来た大木と別れ、三左衛門は独り江戸に潜入した。大木佐内が西高野の自宅に帰ると、そこには水戸の役人がいた。佐内がこれまで晒布や焼酎ほか食料などを頻繁に買ったのを怪しまれ、懸賞金目当ての者に密告されたのであった。逮捕され、水戸赤沼の牢獄に送られた。市川の隠れ家を白状させようとする獄吏の拷問に耐えて、口を割ることのなかった佐内は、幸いに生きて釈放される。

■市川捕らえられる■

江戸に入った市川は、娘が嫁いでいる芝・

三田魚藍坂の宝徳寺に身を寄せるが、危険を感じて寺を抜け出し、青山百人町の剣術指南・島上源兵衛の家に匿われる。しかし、天狗の追及は厳しく、明治二年二月二十六日、遂に捕らえられて水戸へ送られた。もし、この逮捕が一日遅れていたならば、翌日はフランスの船で国外に脱出する手筈が整っていた。

水戸での市川は、連日高札場に生き晒しにされたうえ、同年四月三日、長岡村で逆磔になった。文化三年（一八〇六）四月一日の生まれであったから五十三歳の生涯であった。

逆磔とは柱に逆さに縛られて頭のとっぺんに小さな穴をあけ、血が少しずつ流れだすようにし、長時間をかけて死にいたらしめる最も残酷な刑であった。死骸は江戸街道に晒されて見せ物にされた。この辺りは、当時松並木の続く街道で人家も稀であったが、噂を聞

いた見物人が連日押しかけた。しかし、なんと見物は無料でなく、近隣の者三文、他国からの旅行者は七文をとられ、露天商の店まで並ぶ大賑わいを呈したという。

彼の遺骸が晒された場所には昭和の初期、供養碑が建てられたが、今は道路拡幅で取り払われて移された。しかし、誰が立てるのか常時一本の塔婆に香華が供えられてある。

刑に臨んで市川は「君のため捨てる命は惜しまねど忠が不忠になるぞ悲しき」と辞世を残した。「君」とは一体誰であったか。

天皇陛下と解釈するのが至当というべきであらうが、これまでの歴史家、作家の先生方は、君とは水戸十代藩主の慶篤（順公）、あるいは将軍慶喜とも記している。

額田村（現・那珂町）から諸生党に参加して市川らと共に戦い、故郷に帰って捕らえら

れ久慈川畔で磔になった寺門登二郎は、「君のため捨てる命は惜しまねど、なお、惜しまれる国の行く末」という辞世を詠んでいる。

ここにも「君」が同じような句調で出ているから、おそらく諸生党人士の間には「君」についての統一した考えが存したものと思われるが、いま、それを特定する資料はない。

越後長岡藩の河井継之助は小千谷会談に際して、新政府軍の軍監岩村精一郎に対して、薩長の軍を官軍とは認めない、会津討伐は私戦であると喝破している。

また、会津藩主松平容保は、京都守護職として孝明天皇の信任が篤かった。とくに禁門の変では、始門を守っていた薩摩の兵が長州兵に押しまくられて、あわや破られるかと思えた時、会津兵が横槍をつけて長州軍を追い払ったのである。その恩も忘れ、薩摩が逆賊

長州と組んで会津攻撃とは、容保にも許せぬ仕儀であった。

■諸生は誠忠の士■

水戸藩は尊王が家訓であり、諸生党も尊王であることに違いはない。五奸追討の勅諭により逆賊とされたが、この勅諭には天皇の御璽が捺されており、偽勅ではないにしても、この当時の勅諭はすべて大納言中山忠能が幼帝に御璽を握らせ、その上から自分の手を添えて捺させたものであり、天皇の思し召しではない。クーデターにより政権を得ようとする横暴極まりない薩長に対し、武力をもって立ち向かった河井や容保あるいは水戸の諸生党こそ楠氏に劣らぬ誠忠の士であったのかも知れない。

五奸と名指しされた諸生党の幹部のうち四人は越後、会津、水戸そして最後の決戦場となった下総・松山で死んでいった。ただ独り戦いに加わらず江戸へ登った城代家老の鈴木岩見守重棟は、すでに慶応四年四月、江戸で捕らえられて水戸に送られ、赤沼の牢獄で同月二十三日斬罪にされた。享年三十歳、水戸藩創設以来、代々城代家老を務めてきた鈴木家は重棟をもって絶える。

この間、天狗党として敦賀に捕らえられた武田耕雲齊一派は大半が処刑されたが、耕雲齊の一子金次郎は若年のため死罪を免れ、水戸に帰った。それからの金次郎は、親の仇討とばかり、諸生党に加わった者の家を襲い、殺戮を重ねた。三ノ町に十人、桜田烈士の一人佐野竹之助の弟等も報復の犠牲となった。諸生派と見なされた有能な者たちの多くは

他國に逃げた。明治になって活躍し大成したのは大半が諸生党に与した者たちであった。



逆賊とされた市川三左衛門と同じ運命の侍は長州にもいた。掠梨藤太で、高杉や桂の急進的改革に反対、禁門の変の後始末に際して家老三人を切腹させた人物である。これによって幕府の一次長州征伐をかわし、萩藩の存亡を救う。しかし、高杉らが藩の実権を握ると、追われて藩外に脱出するが、津和野藩に捕らえられて萩に送り返され死罪になる。

萩では掠梨派を「俗論派」と呼び、高杉らの改革派を「正義派」と呼んでいる。これまで掠梨は大悪人とされていたが、最近になって彼こそが藩にとって国にとっても忠臣ではなかったのかと議論されるようになった。

ようやく明治維新の実態を明らかにしようとする研究が活発になり始め、明治政府による官製の歴史が見直されようとしている。それから百三十余年、この国のえらい人たちが、いまや平成維新などと叫んでいるが、明治維新の実態を参考にし、わが日本国の将来の姿・形を分かり易く示してくれるよう期待したいものである。(以下次号)

諸生党の軌跡を追う

歴史の外におかれた侍たち

加比 礼三

水戸郷土史家

◆維新を前に自滅◆

市川三左衛門ら歴戦の諸生党一派は、いくさ上手ながら小勢の悲しき、水戸を脱出してから霞ヶ浦を経て利根川を渡り、下総・八日

市場村に入るが、ここが最後の決戦場となった。破れた市川は単身江戸に潜入するが、やがて捕らえられて水戸に送られ、明治二年四月、逆隣の極刑に処せられる。悲惨な最期であった。維新前夜の水戸藩内の抗争は、まさに勤皇同志の内紛であった。水戸は、あまた

の人材を擁しながら、維新の夜明けを待たずに自滅したに等しい。返す返すも残念というほかはない。

市川は、水戸の城方に追われて果てたわけだが、この処刑の四年前、市川らは、藩の主として水戸城にあり、反乱軍の天狗党を蹴散らしたのであった。天狗党の中心人物の藤田小四郎は、水戸藩主斉昭の懐刀であった藤田東湖の四男である。

東湖は安政二年十月（一八五五）、水戸藩江戸屋敷で震災に遭い、老母を助けようとして自らも圧死した。享年五十歳であったが、それから十二年後に到来する明治維新には、まだ世にあり得たので、もし在世なら、この人物の裁量によって、水戸の維新史は大きく塗り替えられていたかもしれない。東湖の没後三年（万延元年）、名君といわれた水戸藩主徳川斉昭が急死（六十一歳）したのも痛かった。攘夷論であった斉昭は晩年「将来の日本は開港により国力の充実を図る以外に発展の

道はない」ことに目覚めていたのである。

筑波山の挙兵は、東湖没後九年後の元治元年（一八六四）三月だが、この旗揚げの当初の目的は、横浜の外国公館を焼き払い、攘夷を実行することにあった。しかし、方針を換えた天狗党は、水戸城に拠る市川らを追討して水戸城の奪取をもくろむ。元治元年七月二十五日、水戸を攻撃するが、市川率いる守備隊に撃退されて那珂湊に退く。その後、幕府の追討軍を迎えて奮戦するが、十月二十三日那珂湊を脱出して京都を目指す。天狗党が最初、筑波山に登り、檄を飛ばして参加者を募ったときは、藤田ら僅か十数名に過ぎなかったが、その後各地から参加した農民、浪人、更には大発勢も取り込み、那珂湊出立の時は千余名の大軍に膨らんでいた。

大発勢とは、水戸の親藩水戸藩主松平大炊頭頼徳が、水戸藩主徳川慶篤の名代として天狗、諸生の騒動を鎮めるために水戸まで行ったものであった。ところが、この一隊は水戸

城にいる市川等に阻まれて入城が出来なかった。入城できなければ取り敢えず退いて、情勢を再検討する手もあったはずだが、いきなり市川と対峙する天狗の側に合流してしまつた。その経緯ははまだ詳らかではないが、やがて幕府軍に降伏して、藩主頼徳は切腹、随行した藩士、郷士、卒族ら百五十一名は死罪あるいは獄死するという悲運に遭う。

この時、合流しなかつた者は最後まで天狗と行動を共にした。武田耕雲斎もその一人で西を目指して行軍する天狗党軍の総大将に祭りあげられる。越前・新保駅に到達した一行は加賀藩を中心とする追討軍に十重二十重に押さえ込まれ、万策尽きて同藩に降伏する。那珂湊を出発した時は、女子五十六名も加わつて千余名であつたが、新保駅で捕虜となつた天狗党の総員は約八百五十名であつた。そのうち三百五十三名が敦賀で斬罪に処せられる。しかし、処刑された人達の名簿を見て驚くことは、士族は僅か三十七名を数えるに

過ぎない。あとは、農民と神官、町医者らのほか郷士数名が加わっているのみである。すなわち、諸生党との決定的な相違はこの点である。天狗党は下級武士に支えられた農民を始めとする民兵集団であり、諸生は高級士族を含む武士の軍勢であつた。

水戸の人間は、徒党を組んで行動することを好むようであるが、天狗と諸生の争いを見るとか鎮静させようとする集団もあつた。この者たちは鎮派と呼ばれた。ところが鎮派にも二派あつて天狗最前と諸生支持にわかれていた。さらに柳派とよばれた無派閥、無党派の者たちもいた。無党派は、徒党を組むことはないが、風の吹きようでは右につき、左に傾く。柳派がどちらにつくかによって勝ち負けが決まる場面もあり、これらの党派は、武士階級だけでなく、町人、農民の間に広がつてゆく。

◆政情一変で朝敵に◆

天狗挙兵は元治元年三月だが、同年七月、京都では禁門の変が起こり、長州は成敗される立場に追い込まれる。天狗にはタイミングが悪かつた。その結果、孤軍となつて多くの犠牲者を出し、あれな結末となる。

水戸藩の政権は、その後佐藤図書、朝比奈弥太郎、市川三左衛門の三太夫の手に移り、小康を保つに見えた。しかし、水戸藩出身の最後の將軍慶喜が大政奉還し、戊辰の年を迎えると、鳥羽伏見の戦いに破れ、政情は俄に一変して諸生も朝敵とされてしまう。

天狗も諸生も尊王に変わりはないが、幕府崩壊後の政治体制の確立に対する手法の選択は全く違つていた。しかし、天狗の中にも、やがて薩長主導の政治体制になることに疑問をいだいた者がいた。

先に記した通り、天狗党は加賀藩に降伏す

るが、さすが前田家は百万石、水戸藩からやつて来た浪士、農民たちの降伏した捕虜に対して武士道の礼を尽くして厚遇した。

本勝寺、本妙寺、長遠寺の三寺に收容された捕虜たちには酒肴まで支給され、しばらくの間は、のどかな時を過ごすことができた。本勝寺では退屈している隊員を慰めるため幹部武士が講談師代わりになつて、軍談を聞かせる会が行われた。この会を、隊員は「本勝寺のすさみ」と称していた。「すさみ」とは「慰み」の意である。ある日の話のなかで未来の政治体制を予言した者がいた。

天狗党のなかでは最高年齢の山国兵部共昌(七十二歳)である。

このとき慶喜は未だ將軍ではない。山国は講話の中で世の行く末をこう予言した。

「幕府は近い将来崩壊し、新しい政治の仕組みに変わるだろう。そして、天皇を表看板にした長州と薩摩の政権が確立するであろう」と述べて、さらに「時代の変化につれ、薩長

政権は長く続くかも知れないが、国民にとって果して幸福かどうかは疑問である」と長期展望にも触れていて、驚くべき卓見である。

水戸と長州の尊攘派の間には万延元年（一八六〇）、品川沖に停泊していた長州の洋式軍艦丙辰丸の船上に、桂小五郎と水戸の下級侍で天狗系の西丸常刀等が会して「丙辰丸の盟約」を結んでいる。この同盟は「成破の誓い」とも言われた。したがって、天狗党は長州の同盟軍である。しかし、その同盟軍の中にも薩長の合従に疑問を感じている向きがあったわけで、山国の危惧は新政府が樹立されて幾許もなく事実となった。諸生党は、長州を、朝廷に仇なす侵略者と決めつけている。禁門の変では、皇居に向けて発砲し、御所の周辺を焼き尽くした。この大逆を許すわけにはいかない。藩祖頼房、二代光圀以来の尊王の実を示すのはこの時とばかり、門閥の侍同士が結集して、東征の軍と各地で戦うのだが、その評判はすこぶる悪い。

軍資金や糧秣の準備不足で、各地で強制、略奪をしたからである。

天狗、諸生の抗争を鎮めるため説得に努めた一人に久木直次郎という侍がいた。この久木は三太夫について「市川は愚物、朝比奈は平凡、佐藤は利口」と言い残している。久木は、剣を取っては藩内屈指の使い手で、弘道館の剣術指南であったが、弘道館から帰宅の途次、突如、何者かに襲われ、肩に一太刀を受けて大怪我を負った。幸い命は取りとめて明治の世まで生き長らえたが、下手人は不明で、襲ったのは天狗か諸生か謎に終わった。

久木に愚物と評された市川は、決断したことはあくまでやり徹す強固な精神の持ち主であり、最後まで武士集団の団結を崩さず、戦い方も見事であり、単に頑固な保守主義者ではない。フランス語を学び、欧米の政治形態も研究し、共和国の設立を目指す等、開明的な思想の持ち主でもあった。繰り返すが、幕末にきての両派の激しい闘争は、水戸にとっ

ても国にとっても最大の不幸であった。

これを收拾できなかったのは、時の藩主・慶篤が暗君であったからに他ならない。結果は、新しい政府の誕生に必要以上に多大な犠牲を払うことになった。

◆ 怨念に手を焼く県知事 ◆

元号が明治になって、大宝律令による天皇御親政の太政官形態で政治がスタートする。

明治四年の廃藩置県で茨城県が成立したものの、県政を統括する新政府は苦慮する。

原因は言うまでもなく天狗、諸生、鎮派、柳派、無党派入り乱れての抗争の怨念が簡単に収まらなかったからである。初代県令には幕臣山岡鉄太郎が赴任するが、以後、参事、権参事級の大物が次々に送り込まれた。そして、ようやく落ち着きを取り戻し、中央政府の威令が行われるようになったのは、明治も六年頃からであった。

この間、地租反対の一揆、不平旧士族の水戸城放火事件等、生臭い事件が続発する。新政府はアメとムチで懐柔を図る。

諸生党に参加して土籍を剥奪された侍のうち、八十余人の復権を認める。一方、各区の戸長より「派閥を一掃して村中の親睦に努め皇恩に浴する」という誓約書を取り、党派の解体を進めた。

中央集権の政治体制が固まりかけたこのころ、西郷隆盛はすでに新政府に不満を持ち始めていた。西郷南洲遺訓集（明治二十二年刊行）には「こんな政府を作るため戊辰戦争を戦ったはずではなかった。軽輩から成り上がった高官たちが賄賂をとり、豪邸に住み、美妾を蓄えている有様は見るにたえない。戊辰戦争で戦死した人に申し訳ないと落涙した」と記してある。

また、自由民権を唱えた板垣退助は「新政府を武力で倒したいが、残念ながら土佐藩の精兵は国の軍隊に組み入れられて武力を持た

ない。したがって言論で政府を倒すのを目的として自由民権運動を起こした」と晩年には書き残している。板垣は、会津攻城で戦っている間に主権在民の政治体制を考えたと伝えられる。彼が、民選国会の設立を提言して自由民権の運動に走り出したのは明治七年であるが、明治十五年四月、岐阜で暴漢に襲われて負傷する。このとき「板垣死すとも自由は死せず」の名言を残すが、板垣のカッコ良いのもこままで、伊藤内閣の内務大臣等を歴任し、伯爵になり、ただの人で終わった。

時は移り、政治も変わったが、水戸では、戊辰戦争の宿怨はいまだに消えていない。

諸生と天狗の家系で縁組をしたという話は平成の御世にいたるも未だ聞き及ばない。天狗と諸生で結婚するようにとのお上のお達しで私の親は夫婦になったと言っている今も健在な老人の話はあるが、そんな命令がどこから出されたのかは分からない。

水戸に市制が執行されて第一回の市会議員

選が行われたのは明治二十二年であったが、当選者の大半は天狗系の士族であった。

この年、ようやく憲法発布の大赦で市川三左衛門以下二百八十六名の家名再興が許されたが、復権は戸籍に士族と書かれるだけで、国賊の汚名が払拭されたわけではない。

諸生党に参加して死んだ残りの百七十余名の復権が認められたのは明治三十三年であった。この間、天狗党の首謀者は靖国神社に合祀され、武田耕雲斎には正四位が追贈され、その他の者にも贈位が行われた。

勝てば官軍、薩長に味方した者は神様、負ければ賊兵。遺骨を先祖伝来の墓地に埋葬することさえ許されなかった。

明治元年五月、京都東山に招魂社が建てられて、安政の大獄以後の国難に殉じた人が祀られることになったが、水戸では桜田門の變の参加者が最初に合祀される。祀られる理由は「維新の源を築いた」と言うことであるが、果してあの時点で、十七士が維新を意識して

いたか、どうかには疑問が残る。

国難に殉じたのは、長岡藩兵も会津藩兵も諸生党もみな同じではないか。京都守護職として孝明天皇に信任の厚かった松平容保は、明治になって「戊辰の戦いは、君恩に報いるためであった」と書いている。

その後、戊辰戦争の戦死者は敵味方の別なく全員靖国神社に祀るべきであるという論議が国会で行われ、会津藩については大正年間によくややく、禁門の変で戦死したわずか数名のみが祀られることを許された。国民的な人気の白虎隊も新撰組隊士も祀られていない。神の国・日本の神様には差別があるらしい。

稿を終るに当たり、今日の政治にも、一言触れたい。小泉さんは、構造改革を声高に訴えたのが受けて総裁・総理に選ばれ、新しい内閣が出来たが、小泉さんは施政演説で「新世紀維新」といった。改革はすべて反乱から始まる。今回の総裁選も、自民党の一般党員の反乱が勝利をもたらした。無党派の

国民も、この結果を歓迎して、内閣の支持率は新記録となった。徳川幕府は二百六十年続いて、薩長により崩壊する。薩長によって確立された明治政府の体制は、百四十年を経て、新たな改革が始まろうとしている。振り返れば、昭和二十年までの間は、戦争の時代であった。軍は敗戦で解体したが、政治家と官僚の意識と体制は変わることがなかった。

「歴史の中に明日の政治を探る」とこの政談春秋の表題に書かれている通り、歴史は多くの教訓を与えてくれる。歴史に学び、前車の轍を踏まず、新しい歴史を残せるよう新閣僚には頑張って頂きたい。

改革の次第では、ベートローベンのヘアスタイルの肖像が、民営郵便事業の最初の切手になることが将来あるかもしれない。(了)